

2022年12月25日

中央大学文学部

# 英米文学研究

第40号

---

## 目次

### 学部卒業論文

- The Great Gatsby* における階級と自己信頼 …………… 坂口 巧 (3)
- Beloved* における濃すぎる母性愛 …………… 長瀬 歩優 (19)
- 皮肉の生成と認識のメカニズム …………… 佐藤 正陸 (37)
- 分離文における否定表現の習得研究 …………… 小野寺 琴弓 (55)
- 経験を表す「たことがある」と「ている」……………山本 実佳 (73)

### 大学院論文

- Sisterhood in *Goblin Market* —Sisters can also form a marriage—  
…………… Chencheng Zhao (93)

中央大学英米文学会会則  
英語文学文化専攻専任教員/編集後記

中央大学文学部英米文学会

学部卒業論文



## *The Great Gatsby* における階級と自己信頼

坂口 巧

### 序論

本論文では、F. Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* を取り上げる。著者 F. Scott Fitzgerald は、アイルランド系カトリックの両親の元 1896 年に中西部ミネソタ州セントポール市で誕生した。1917 年、プリンストン大学を中退し第一次世界大戦に従軍、1920 年に処女作 *This Side of Paradise* の成功により一躍時代の寵児となる。彼は妻のゼルダと共に、彼の短編から名づけられた「ジャズ・エイジ」と呼ばれる享樂的で浪費的な生活を過ごした 1920 年代の都市部の若者の象徴的存在となった。しかしその後は、1922 年 *The Beautiful and Damned*、1925 年 *The Great Gatsby*、1934 年 *Tender is the Night* を出版するも商業的成功を得られず、大恐慌の影響や妻ゼルダの統合失調症に伴う医療費などにより経済的に困窮していき、アルコール依存症に陥る。その後はハリウッドに拠点を移し、*The Last Tycoon* の執筆に取り組む中、1940 年心臓発作により、未完のまま 44 歳で亡くなった。

彼が 1925 年に発表した *The Great Gatsby* は、ニューヨーク州ロングアイランドに住む大富豪ジェイ・ギャツビーを巡る物語を語り手ニック・キャラウェイの視点から語られた小説である。中西部から東部ロングアイランド、ウェスト・エッグへ移住したニックは、大学の友人トムとその妻でありニックの又従兄妹であるデイジーとの交流の中、大富豪ギャツビーの存在を知る。当初はギャツビーに対して胡散臭い印象を抱いていたニックだが、彼の別れたデイジーと会いたいという夢や彼の過去を知る度に彼に好意を抱くようになる。しかし夫のトムにより、ギャツビーの裏社会との関わりを暴かれ彼の夢は叶わなくなる。その後、デイジーがトムの不倫相手マートルを自動車事故により殺したという事実をギャツビーが被り、彼女の夫であるジョージによりギャツビーは殺される。それらの様子からアメリカ東部に絶望したニックは、故郷である中西部へと帰っていくという物語である。

『グレート・ギャツビー』の主題としては、田中久男が「ニューヨークが物語の主要な展開場面となっている『グレート・ギャツビー』では、階級は経済格差に還元される問題、つまり、個人の努力と運によってそうした格差を埋め合わせることが出来る問題として扱われている」（田中 14）と述べているように、経済的格差の問題として扱われることが多い。そこで、本論ではこの作品において命を奪われる存在である

マートル・ウィルソン、ジョージ・ウィルソン、ジェイ・ギャツビーの三人の敗北の様子から、上流階級であるニックの価値観がどのように変化していったのかを読み解いていき、フィッツジェラルドのアメリカ社会に存在する経済的格差以上の血統的な階級の存在とその批判、そしてその階級観を改めるために、人間個人への信頼を訴えているのではないかという観点から論じていく。

## 第1章 1920年代アメリカとフィッツジェラルド

この章では、第一に1920年代におけるアメリカの社会状況を、経済発展の面とそれに伴う格差拡大、社会不安の両面に注目し、第二にフィッツジェラルドの幼少期と彼の金持ちに対する価値観から上流階級への両義的な感情を読み解き、アメリカにおける階級格差と『グレート・ギャツビー』の主題と考えられるテーマについて定義していく。

第一について述べる。フィッツジェラルドが生きた1920年代のアメリカは、「狂騒の20年代」と呼ばれるような、大衆消費社会であった。有賀夏紀は「アメリカの国民総生産は年五パーセント以上成長し続け、インフレはほとんどなく、ひとりあたりの所得は三〇パーセント以上増えた」（有賀104）と述べている。そのような経済状況の中で、国民は生活必需品以外の品、自動車やラジオ、電話や蓄音機などの生活必需品以外の消費が増加していき「こうした消費が大衆に広がることで、アメリカ社会の貧困はなくなり、階級・民族・人種による人々の違いは解消する」と考えられる程であった。アメリカの大量生産大量消費社会は、人々に物資を届けることが出来るというアメリカの生産力の増大と、資本主義への信頼感を国民の間に広く浸透していった。さらに文化的にもアメリカ社会の変革は起こる。代表的なものとして「フラッパー」とよばれる女性が現れたことが挙げられる。彼女たちは、「足まですっぽり隠していたスカートは膝まで上がり、髪は短くし、口紅をつけて街を大股で歩く女性の姿はまさに「新しい女性」のそれだった。」（有賀114）これまでの社会で抑圧されてきた女性たちが、旧来の価値観に縛られずに社会生活を送るなど、「キャリアウーマン」的生活を謳歌する人々もいた。また戦中から南部北部へと移り住んでいった黒人たちによる文化活動から生まれた「新しい黒人」も挙げられる。「新しい黒人」とはニューヨーク市のハーレムに代表される北部黒人コミュニティから、音楽、美術などの豊かな文化を育んだ人々が示した新しい黒人像であり、白人に黒人文化や黒人の価値を認めさせ、黒人の誇りや自信を持たせた。

しかし、そのような経済発展と反対に貧困層もまた大きく拡大していった。経済発展の恩恵を受けることが出来たのは消費者として成長した白人中産階級であり、それ以外の労働者階級や農民、東欧、南欧からやってきた移民にとっては格差の拡大が広がるばかりであった。労働者階級は、自動車や電気等当時のハイテク産業を除いて賃金の向上はなく、1800ドルが年間生活費と言われていた中労働者賃金の平均は1500ドル以下と言われていた。また移民、戦後拡大した特に南欧、東欧移民は1924年に制定された移民法により WASP 以外の人々の移民を制限されている。有賀によれば「一九二四年の移民法は、一八九〇年の国勢調査における出身国別人口の二パーセントの移民を許可するというものであり、東欧南欧からの出身者がまだ少なかった年を基準にすることにより実質的に「新移民」を排除することになった。」(有賀 125) というものであった。当時の繁栄の背後では、さらなる貧富の差の拡大を招き、移民への法的な制限などアメリカ政府によってワスプの中産、上流階級以外の人々の生活を脅かす社会不安要素が取り除かれるように動かれていたことが分かる。これらの要因として、当時の都市の社会変革に対する農村部在住のアメリカ保守層の反発が挙げられる。彼らは伝統的なアメリカらしさから外れるもの、非伝統的な都市部の生活や移民、共産主義への排斥を強めた。その代表として、KKK (クー・クラックス・クラン) の存在が挙げられる。「KKK は排除の対象として移民、ユダヤ人、カトリック教徒に移し、「人種の純潔」「アメリカ的伝統」「アメリカ的道德」の守護者をもって任じ、進化論、共産主義、国際主義、平和主義、酒の密造販売、産児制限など新しい社会の動きすべてに反対した」(有賀 124) と言われ、1920年代半ばには中西部、南部で流行し会員数は500万を越えた。このように、当時のアメリカでは経済的な繁栄と共に大きな社会変革も巻き起こった。しかし同時に経済的格差はますます拡大し、変革に対する反動勢力の興隆など現代まで続く社会問題も同時に発生した時代であった。

第二に、フィッツジェラルドの上流階級への感情について述べる。フィッツジェラルドは『グレート・ギャツビー』執筆のきっかけの一つとして次のように述べている。

「ギャツビーを着想したのは、一にも二にも貧しい若者は金のある女の子とは結婚できないという不公平さだ。このテーマは、僕自身そういう生き方をしたから繰り返し浮かび出てくるのだ」(ターンブル 166)。フィッツジェラルドは、ミネソタ州セントポールで誕生した。東部出身の家柄が占める血統主義的な特権階級が存在する中でアイルランド系をルーツに持ち、母方の祖父の卸売業で発展したという経緯を持つフィッツジェラルド家は、セントポールの周縁部に置かれていた。ターンブルはセントポールについて「南北戦争以前のセントポールには“血筋”主体の特権階級が存在して

いた。ときたま金の方で社会の上層部にのし上がる開拓移民もいたが、若い人たちは物好きから、あるいは冒険心に駆られて、さらに西へと移住していたから、この町の上流階級はあらかじめ古くから根を下ろしている東部出身の家柄に占められていた。」

(ターンブル 27) と述べる。しかし、フィッツジェラルドの家系は、渡辺利雄によれば「父がメリーランド植民地に移民してから 200 年の歴史を持った古い家柄であるのに対して、母方のほうは 1842 年に引っ越してきたばかりの家柄である」(渡辺 270) であるという。フィッツジェラルドは、血筋では上流の父は貧しく、反対に血筋では新興に当たる母の財産で生活を営んでいた。血筋的に上流階級であると自負しながらも、金銭的に上流階級ではないという事実は、フィッツジェラルドの目の前に存在した上流階級への複雑な憧れを抱かせた。フィッツジェラルドの金持ちへの考え方についてターンブルは次のように述べている。「ギャツビーという人物に、彼は若いころの有産階級に対する感情——金持ちは人生の特別観覧席のいい席を占めた、かけ離れた人種だとか、彼らの生活は波の人間のそれよりもどうしたわけか優雅で張りがあるのだとか——を対象化し美化していた。富のバリエードに守られた彼らは王侯貴族とっていいほどに彼には思えたのだ」(ターンブル 166)。ここからは、彼が金持ち、上流階級に対してある種ロマンチックな感情を抱いていることが分かる。しかし、彼は同時に上流階級に対する批判的な感情も持ち合わせている。彼はまたこう述べている。「——金持ちが住む町で貧乏な子供だったし、金持ちの子弟が行く私立学校で貧乏な少年だったし、プリンストンの金に恵まれた学生の社交クラブでも貧乏な青年だった。〔中略〕金持だということだけで彼らを許せないままできたし、それが私の全人生と作品を彩ってきた。」(ターンブル 166) とある。ここからはフィッツジェラルドは金持ちへの両義的な関心を、『グレート・ギャツビー』の中でギャツビーという人物に代弁させていることが分かる。フィッツジェラルドは、当時のアメリカを覆っていた社会変革の不安と、格差の拡大、そして自身が体感した上流階級という存在、そして上流とそれ以外との格差、理不尽を彼は『グレート・ギャツビー』を通して描き出そうとしている。

## 第2章 階級の壁に敗れざる人々

本章では『グレート・ギャツビー』において、前章で述べたアメリカ社会における階級的格差の存在を前提にしながら、階級格差によって翻弄された人々が階級の前にいかに打ちのめされるのか読み解いていく。第一にジェイ・ギャツビーについて言及

する。まず彼の想像力と価値観の下地に触れながら、彼がトム達上流階級の壁の前に敗北する様子を読み解いていく。第二にジョージ・ウィルソンについて言及する。まず彼が住む「灰の谷」の様子、そして彼がその住人としてトムにどのように翻弄されていったのか論じていき、最後にウィルソンとギャツビーとの共通点を第8章から読み解いていく。第三にマートル・ウィルソンについて。まず第2章から彼女の生活、トム、ウィルソンに縛られざるを得ない貧困層、女性という二重の階級について言及しながら、彼女とギャツビーの共通点について考えていく。

第一にジェイ・ギャツビーについて、彼の「ジェイ・ギャツビー」を生みだした想像力と、彼を作り上げたダン・コーディについて述べる。ギャツビーは、アメリカ中西部に位置するノース・ダコタのドイツ系貧農の子としてジェームズ・ギャッツの名を受けて誕生した。しかしその後、彼はジェイ・ギャツビーと自らの名を偽り、リトル・ガール湾で偶然出会ったダン・コーディと共に船乗りとしての生活を始めた。なぜジェームズ・ギャッツからジェイ・ギャツビーへと自らを偽る必要があったのか。ニックは第6章においてギャツビーをこう言い表している。

The truth was that Jay Gatsby of West Egg, Long Island, sprang from his Platonic conception of himself. He was a son of God – a phrase which, if it means anything, means just that – and he must be about His Father's business, the service of a vast, vulgar, and meretricious beauty. So he invested just the sort of Jay Gatsby that a seventeen-year-old boy would be likely to invent, and to this conception he was faithful to the end. (95)

ロングアイランドのウェスト・エッグ在住のジェイ・ギャツビーの真実とは、彼は彼自身のプラトンの純粋観念から生まれた像だということだ。彼は一人の神の子供——一般的表現としてではなく、文字通りの意味で——として、父なるものの仕事に就き、広大で、低俗で、まやかしの美に仕えるしかなかった。こうして彼はジェイ・ギャツビーを創造した。それはいかにも17歳の少年が作り上げそうなものだったが、彼は最後まで、その観念に対して忠誠を貫いた。

ここからギャツビーは自身の両親、非ワスプ的な血縁を断ち切り、自身で新たに理想とするような人間の、理想とする人生を作り上げようとしていたことが分かる。それは自らを神と同一視するような驚異的な想像力の強さであり、また自らがジェイ・ギ



ヤツビーという神の子供に姿を変えられるという自分自身の可能性への絶大な信頼感の表れでもある。またニックは、ギャツビーに対して「人生のいくつかの約束に向けて、ぴったりと照準を合わせることの出来る研ぎ澄まされた感覚が、彼には備わっていたのだ。」と称している。ここからギャツビーは、自己への強大な信頼感と希望を頼りにアメリカでの成功を邁進していたことが分かる。

では、ギャツビーという抽象的な理想に、「いささか風変わりではあるけれど適切にして要を得た教育」(村上 185)を残したダン・コーディとはどのような人物なのか。彼の名の由来は、アメリカの最初の開拓者の一人であるダニエル・ブーンと、最後の開拓者であるウィリアム・コーディであると言われており、西部開拓時代という過去の象徴であると言える。ギャツビーは彼の船に対して、“To young Gatz, resting on his oars and looking up at the railed deck, that yacht represented all the beauty and glamour in the world”

「若きギャツは、オールに手をかけて休みながら、手すりのついた甲板を眺め、このヨットは世界の美と魅力の全てを表していると思った。」(96)と感じている。これはギャツビーにとって彼との出会いは、神の子が求めた成功がダン・コーディ的な成功として具体化されたことを表している。リーハンは、「ギャツビーは、東部で自らを想像し西部へ赴く代わりに、西部で自らを想像し東部へ赴く」(リーハン 79)と述べる。これはジェイムズ・ギャッツがジェイ・ギャツビーへと名を変え、ノース・ダコタからコーディの船に乗り込んだ後、デイジーと出会い、ウルフシェイムとの裏事業によって手に入れた大金やノルマンディ市庁風の豪邸を手に入れる過去に当てはまる。そうして自らを上流階級の一員となれば、デイジーとの結婚は可能であったとギャツビーは信じていた。“However glorious might be his future as Jay Gatsby, he was at present a penniless young man without a past,”「ジェイ・ギャツビーとしての未来が壮麗なものであっても、現在の彼は過去の実績のない、一文無しの青年でしかなかった。」(141)とある。これはギャツビーが自分の未来によって、過去を変えられると信じていたことに他ならない。しかし、トムやデイジーなどの上流階級層にとってはギャツビーの存在、自分達の階級に踏み込んでくる非上流階級は脅威であり、恐怖でもあった。それが表れているのは第6章、デイジーのウェスト・エッグへの恐怖を感じる場面だろう。

But the rest offended her - and inarguably because it wasn't a gesture but an emotion. She was appalled by West Egg, this unprecedented "place" that Broadway had begotten upon a Long Island fishing village - appalled by its raw vigour that chafed under the old euphemisms and by the too obtrusive fate that herded its inhabitants

along a short-cut from nothing to nothing. She saw something awful in the very simplicity she failed to understand. (103)

しかしそれ以外のものは彼女を不快な気持ちにした。そこには議論の余地がなかった。それは、感情であったからだ。彼女はウェスト・エッグというロングアイランドの漁村にブロードウェイが作り上げたこの前代未聞の「場」に愕然としていた。また彼らの古い婉曲的な物言いを擦り減らすような生々しい活力、そして住人を無から無へと追いやるような、あまりにも目障りな運命にも。自分の理解が及ばない見事な単純性に、彼女は恐ろしいものを見て取った。

ワスプとしての階級が脅かされそうとしていた 1920 年代、ギャツビーは上流階級が恐れ制限した移民であり、新興の都市の金持ちであり、「新しい黒人」に近い存在であった。それはイーストエッグというワスプの象徴として描かれているトムにとって、ギャツビーはデイジーとの生活を脅かすだけでは無く、従来の価値観を覆すような力を持って、自分達ワスプの場に侵食してくる脅威の象徴でもあった。トムは第 1 章において自らの有色人種への恐怖感を、本を用いて次のように語る。“The idea is if we don’t look out the white race will be—will be utterly submerged. It’s all scientific stuff; it’s been proved.”「この本では、気を付けなければ白人はそのうちにすっかりどん底に追いやられてしまうだろうということなんだ。この説は科学的な根拠に基づき、ちゃんと証明もされている。」(18)とある。トムにとって、科学的に彼らは「白人種」を脅かす侵入者であった。彼らの恐怖感は、第 7 章において排除という形で現れる。マートルを自動車事故で殺害してしまったデイジーの罪を、ギャツビーは庇った。その夜、ニックはトムの屋敷で、デイジーとトムの会話を目撃し、“He was talking intently across the table at her, and in his earnestness his hand had fallen upon and covered her own”「トムはテーブル越しに、デイジーに向かって真剣な顔つきで何かを語りかけていた。思いが高まって彼の手は彼女の手へ落ち、覆うように重ねられた。ときおり彼女は顔を上げ、彼を見て、同意するようにこっくりと頷いた。」(138)であると語る。これに対してニックは、彼らは何らかの共謀をしていたと考えている。その後、ギャツビーはウィルソンにマートルを殺したと誤解され、殺される。ギャツビーに罪を肩代わりさせるよう共謀がなされていたというニックの想像が現実であったことが分かる。ギャツビーが殺された理由は、デイジー、トムら上流階級にとってギャツビーは、あくまで「異物」であったからに他ならない。上流階級に入り込みすぎたギャツビーは、彼らの脅威感

により最後には排除される結末しか用意されていなかった。ギャツビーが敗北した階級とは、金銭的成功では覆すことの出来ない、血筋という階級格差であった。

第二にジョージ・ウィルソンについて述べる。彼は灰の谷というアメリカ都市における格差の象徴として作品内に表れている場で生活している。「灰の谷」とは、ロングアイランドからニューヨークへ向かう際に通らざるを得ない場所であり、当時の消費社会によって生み出されたゴミの堆積場である。そこは経済的に成り上がることの出来なかった、許されなかった人々が住まう町として描かれ、その住人は一日中生氣を失った「灰の人間」たちとしてニックに語られている。そこに描かれているものは、上流階級が生み出したゴミの中で生きる貧困層という暗喩であり、アメリカにおける格差の象徴である。ジョージ・ウィルソンは、灰の谷のメインストリートに位置する場所にある自動車修理工である。彼は妻のマートルと共に灰の谷に暮らしている。妻はウィルソンとの結婚を後悔し、トムとの不倫を行っている。しかしウィルソンはそのようなマートルとトムとの不倫に気づく様子無く、またトムに乱雑に扱われるような愚鈍な人物であるように描かれている。ニックも彼について、“He was a blond, spiritless man, anaemic, and faintly handsome. When he saw us a damp gleam of hope sprang into his light blue eyes.” 「彼は金髪で、整った顔立ちではあるものの無気力で、生氣というものが一切感じられない男だった。我々の姿を見たとき、彼の淡い青い目に、希望の光がかすかに宿ったようだった。」(28)と述べている。髪で青い目をもっているワスプ的特徴を持つ彼が灰の谷にいたことが、アメリカの経済格差は、ワスプ階級にも起こっているという格差の拡大の表れになっていることが分かる。ウィルソンとトムの非対等性は、トムがウィルソンよりも金銭的に上位に立っているという、経済的な差が要因として表れている。作品上、車を売るトムだけがウィルソンの生計の頼りになっているのだ。そしてマートルがウィルソンを見限っている様子から、当時の男性規範としては経済的にも男性的にも弱者として描かれている。そこから分かるように、ウィルソン自身もまた物語において格差の象徴として描かれている。

そのことが大きく表れているのは、第9章、ウィルソンがギャツビーを殺した事件においてだろう。ギャツビーが死んだ後、トムはニックに、ウィルソンがギャツビーを殺した理由を保身的に“‘What if I did tell him? That fellow had it coming to him. He threw dust into your eyes just like he did in Daisy’s, but he was a tough one. He ran over Myrtle like you’d run over a dog and never even stopped his car.’” 『本当のことを言って何がいけない? あいつの自業自得だ。君もデイジーと同じように、あいつに調子よく騙されていたんだ。しかしあいつはひどいやつだ。マートルを犬のようにひき殺しておきながら、

車を停めもしなかったようなやつだ。』(169) と述べる。トムは、確かにマートルの死を悼む点で完全な悪ではない。しかし自らは関与せずにギャツビーの排除をウィルソンに押し付けるという構図において、ウィルソンは上流の生み出すゴミの堆積場である灰の谷の住人としての運命を全うさせられたと言える。

ウィルソンは格差の中にいながら、ギャツビーのように階級の壁に挑むことは無く、翻弄されるままであった。しかしそのようなウィルソン自身にもギャツビーと共通する箇所、想像力の強さがある。それは第8章において、マートルの不倫の事実、そして誰に殺されたのか見当がついたウィルソンに次のように表れている。“‘God knows what you’ve been doing, everything you’ve been doing. You may fool me, but you can’t fool God!’ Standing behind him, Michaelis saw with a shock that he was looking at the eyes of Doctor T. J. Eckleburg.” 『神はお前が何をやってきたか知っている。お前は俺を欺くことはできるかもしれん、しかし神を欺くことはできないぞ!』ウィルソンの背後に立ち、彼の見ているのがT・J・エックルバーグ博士の目であることを知って、ミカエリスは度肝を抜かれた。」(152) とある。ここからは彼は寂れた広告の目から神の目を見出し、さらに自分はあざむけても神様はあざむけないとウィルソン自身が語る、つまりウィルソン自身もまた、神のような視点を手にいれたと感じていることが分かる。それはウィルソンが神との合一化を成したということになる。ここからは、ギャツビーの「プラトンの純粹観念」から生まれたとするような強大な想像力と似通った力をウィルソンに見出すことができる。しかし、ウィルソンはその想像力の強さを活かす場を与えられずに、上流階級の代わりに殺人という手を汚す行為に駆り立てられたという点で、階級格差に翻弄された存在として描かれているといえる。彼の階級格差とは、同じワズプでありながら金銭的な格差によって悲劇へと導かれる、経済格差の表れに他ならない。

第三にマートル・ウィルソンについて述べる。マートルは灰の谷の住人としてジョージ・ウィルソンと共に暮らしている。彼女の性質について、第2章においてニックは次のように語る。“‘contained no face or gleam of beauty, but there was an immediately perceptible vitality about her as if the nerves of her body were continually smouldering’ 「顔には特別な美や光は無かった。しかし、まるで彼女の神経が燻っているような活力は、一目で感じ取れた。」(28)。ここではウィルソンとは真逆の描かれ方をしている。ウィルソンが「生気の無い」に対し、マートルは活力にあふれている。その活力を満たすように、彼女はトムとの不倫により、自らの自己実現として、上流階級の一員であるように振舞っている。マートルがトムにあてがわれたアパートの一室では、部屋の小

ささに対して不釣り合いなほど大きな家具が敷き詰められている。またミネラルウォーターを持ってくるようマートルに頼んだトムの発言に対して、ボーイが氷を持ってこないと嘆く。「全く、あの連中ったらね！休みなくがみがみ言っておくちや動かないんだから」ここからは、彼女が自らを上流階級の人間であろうとしていることが分かる。マートルの生活は、今村楯夫によれば「貴族趣味的なものへの憧れと模倣が、彼らの劣等感となってそれが結果としてグロテスクなほどに不釣り合いな趣味の悪さを強調することになる」（今村 61）と述べ、マートルの劣等感の表れとしている。確かに彼女の部屋の無節操さや、トムの経済力によって自らの自尊心を慰める姿はグロテスクにも映る。しかし、第二章において自らの自己実現の糧であるトムもまた、彼女を抑圧するものであることがわかる。“‘Daisy! Daisy! Daisy!’ shouted Mrs. Wilson. ‘I’ll say it whenever I want to! Daisy! Dai—’ Making a short deft movement, Tom Buchanan broke her nose with his open hand.” 『『デイジー！デイジー！』ミセス・ウィルソンは叫んだ。『言いたいだけ言わせてもらおうわよ。デイジー！デイー』トム・ブキャナンは無駄のない動作で、相手の顔を平手で打った。』（39）。ここから彼女は、あくまでもトムの庇護下に置かれることでしか自らの活力を慰めることができないことが見てとれる。トムの許容範囲を超えた瞬間、彼女の活力は打ちのめされる。また第7章において、ウィルソンは、マートルと共に灰の谷を出て西海岸へ向かおうとする。“And now she’s going whether she wants to or not, I’m going to get her away.” 「でも今となつては、あいつが望もうと望むまいが、一緒に連れていきます。」（118）とある。夫の決定事項に彼女が着いていくことは前提なのだ。

彼女には自己実現を他者に頼らざるを得ない環境に加え、灰の谷という経済的な階級と、女性という性別による二重の格差の前に打ちのめされざるを得なかった。しかし、彼女にはギャツビーの想像力の強さと同質のバイタリティが見いだされている。例えば、彼女のアパートの節操の無さは、ギャツビーの大豪邸の縮小版であるように描かれている。彼らの共通点として、階級の壁を、物を通じて乗り越えようとしているように映る即物的なバイタリティを持つ。しかし、彼女はデイジーに轢き殺され、彼女の活力もやはり発揮されることなく死んでいく。

マートルもまた、ギャツビーと同様の想像力、バイタリティの強さを持ちながらも、女性、貧困という二重の階級格差の中で敗北に追い詰められた存在として描かれており、マートルの敗北は、ジェンダー的階級の壁を表すものである。

### 第3章 優生学と自己信頼

第3章では、上述したジョージ、マートル、ギャツビーの三名の敗北を受けて、語り手ニックの学び、そこからフィッツジェラルドが『グレート・ギャツビー』において、何を書き出しているのかを読み解いていく。第一にニックの経歴や語りから、彼の高い階級と偏見的な意識を示し、第二に上流階級のニックがなぜギャツビーへの共感を抱いていくのかを彼の語りの変遷、彼とギャツビーの共通項から考察していく。第三にニックがギャツビーから学びえたこと、そしてその影響についてマートル、ウィルソンへの語り、第九章から読み解いていき、最後に作品全体に通底する優生学の思想を取り上げ、フィッツジェラルドがこの作品において階級差を超えた人間への信頼を書き出していることを述べる。

第一について、ニック・キャラウェイの人物像について述べる。彼はこの物語の語り手であり、彼の視点や語りを元に物語が進んでいく。語り手の中立さを説明するように、第1章冒頭では彼が自分自身についてどのような人物なのか述べている。"In my younger and more vulnerable years my father gave me some advice that I've been turning over in my mind ever since. 'Whenever you feel like criticizing anyone,' he told me, 'Just remember that all the people in this world haven't had the advantages that you've had.'" 「僕がまだ年若く、心に傷を負いやすかった頃、父親が忠告を与えてくれた。その言葉について、僕は何度も反芻させてきた。「誰かのことを批判したくなつた時には、こう考えるようにするんだよ」と父は言った。「世間のすべての人が、お前のように恵まれた条件を与えられたわけではないのだと。」(7)。ここでニックは、何事によらず物事をすぐに決めつけないという傾向、つまり語りの中立性をニックは身に着けたと語る。しかしここで分かることは、父からの教えによって自分自身が恵まれた存在であることを理解していることである。これは父からの教えが、アメリカにおいて生まれながらに恵まれた者とそうではない者の差、つまり階級が存在するという前提の提示になっており、ニックもこれから上流階級としての立場から語るという意味に他ならない。またニックは、先祖にバックルー公爵を抱く三代続く伝統ある階級に生まれている。これは第1章で述べた、フィッツジェラルドが複雑な憧れを感じていた上流階級であり、そうであったかもしれない自分自身の姿でもある。彼はまたイェール大学を卒業している。それは父親も同じ大学を四半世紀前に卒業している伝統であり、トムと同じ大学でもある。また彼は中西部の故郷から、東部へ証券業界の仕事を行うために移住した際にも、親戚同士の協議を受け一年分の援助を受けている(8)。ここから分かることは、

ニックは前章の三名と異なり階級的、経済的に何不自由のない生活を送ってきたことが分かる。彼は第1章で述べた格差社会における上流階級者である。彼らの同質性を指摘できる点として、第四章においてニックがギャツビーと共にニューヨークへと向かう際に、ギャツビーの過去を聞かされる場面が挙げられる。ギャツビーが語る荒唐無稽な過去をニックは笑い飛ばす。しかし、その直後に彼はギャツビーから戦争の功績を受けた勲章を見せられる。すると彼の評価は一変する。“Then it was all true. I saw the skins of tigers flaming in his palace on the Grand Canal; I saw him opening a chest of rubies to ease, with their crimson-lighted depth, the gnawings of his broken heart.”「すべては真実であったのだ。ヴェニスの大運河にある彼の宮殿を鮮やかに彩るいくつもの虎の毛皮を僕は想像した。絶え間ない心痛を和らげるため、ルビーの詰まった宝石箱を開け、その緋色の光の深みを愛でる彼の姿が目に見えた。」(65)という。しかし彼の戦争の功績が本物であっても、おとぎ話のような過去が本当であるとは限らない。しかし彼は勲章を受け入れた時点で、彼の全ての話を信じるようになった。それは「科学的」という言葉から、人種差別やワスプ優位の正当性を信頼するトムと似通っている価値観、権威への信頼を二人が共有しているということである。また、第2章においてトムがマートルに子犬を購入する場面では、トムはその子犬を雌犬、ビッチであると断言している。ニックもまた、その子犬が純潔ではない雑種犬であることを意識して語っている。“the Airedale—undoubtedly there was an Airedale concerned in it somewhere, through its feet were startlingly white—”「そのエアデールは—エアデールがどこかの段階で血筋に関わったことは確かなのだが、脚は驚くほど真っ白だった。」(30)。ここからは犬の血統の純粋さに、無意識からか拘ってしまう彼らの様子からは自分自身が「純粋」なアメリカ人の階級であるという階級意識を彼らが共有していることがわかり、それは今後のギャツビーへの階級意識をうかがわせるようでもある。トムとニックは、一見対立する人物のようでありながらも同一の価値観の中で育った人間であり、ニックは当初ギャツビーというより、むしろトム側の人間、人種や階級から人間を判断する人物であった。

それではトムとニックが同様の性質をもった人であるならば、なぜニックは最後にギャツビーへの信頼を感じ、トムに代表されるアメリカ東部を侮蔑するようになったのか。それはニックとトムが似ているように、ニックとギャツビーも程度の差こそあれ、似ている、共通する価値観を持っているからではないか。その価値観とは、やはり自分自身への信頼である。

第1章においてニックは、東部へと移住を果たしてから数日後に人から道を尋ねら

れる。その時にニックは“I was a guide, a pathfinder, an original settler”「僕は道先案内人であり、開拓者であり、最初の入植者なのだ。」(9) と感じる。自分自身を、生活をゼロから始めたアメリカ入植者と重ね合わせるように、ここからは彼もまた神の子であるギャツビーと同様の、自身への信頼を持っていることが伺える。そして第4章では、ニックはダン・コーディの船に希望を見出したギャツビーのように、ニューヨークの持つ希望を“The city seen from Queensboro Bridge is always the city seen for the first time, in its first wild promise of all the mystery and the beauty in the world.”「クイーンズボロ橋から見る街の景色は、常に初見の光景として、そして世界のすべての神秘と美しさを請け負ってくれるような最初の約束として映されるのだ。」(67) であると語る。ニックにとってニューヨークは、「世界的美と栄光を具現する」ものだったのではないか。ニックはつまり、トムと同様のワズプ中心的な価値観を抱いた上流階級でありながら、ギャツビーと同様、自身への無限の可能性を信じる人間だったのではないか。そうであればこそ、ギャツビーが階級を飛び越え、上流階級への道をひた走る姿に無意識の価値観に縛られながらも、強い共感を抱いたのではないか。

第8章において、ニックは以下のように語る。“They’re a rotten crowd, I shouted across the lawn. You’re worth the whole damn bunch put together. I’ve always been glad I said that. It was the only compliment I ever gave him, because I disapproved of him from beginning to end.”

『あいつらは皆、腐っている』と僕は芝生の庭越しに叫んだ。『皆合わせても、君一人の値打ちもない』あのように言えて良かったと、今でも思っている。それは僕が彼にこれまでに与えた唯一の賛辞になった。なぜなら僕は、結局初めから終わりまで、彼を支持することは出来なかったからだ。」(146)。ここからは、ニックは彼の行動の全てを受け入れたわけではないが、ギャツビー以上にニックと程度の差こそあれ同様の信念を抱き、自分自身への信頼を抱いた人物はいなかったこと、そのような彼への信頼と自らの価値観との齟齬が彼の中で起こっていることが伺える。

そしてギャツビーの死後、ニューヨークはギャツビーの成功が叶わない場所になり、薄気味の悪いグロテスクな場になり果てたとニックは認識した。自分と同様の価値観を抱くはずのギャツビーが、上流階級の脅威感から排除されたことによって彼は初めて自分自身の階級意識に疑問を抱くようになったのだ。

それでは、ニックが疑問を抱いた階級意識とは一体どのようなものか。ギャツビー達が敗れた階級の壁とは、経済的な観点からだけではない。経済的には成功したギャツビーは上流階級の脅威に殺害され、経済的弱者であるウィルソンやマートルにおいても、困窮ではなく上流階級の都合の良いように扱われたことに悲劇の焦点がある。



これについて光富省吾は、当時のアメリカの階級観に優生学が用いられていたと述べる。

アメリカでは十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、アイルランド、東・南欧そしてアジアから大量に流入する移民によってアメリカ社会がこれまでにない人種的、民族的多様性を持ち、大きく変貌しようとしていた。そのようなときに、ダーウィンの弱肉強食、適者生存の法則とダーウィンのいとこ、フランシス・ゴルトンの優生学が当時のアメリカ保守層に受け入れられたことは想像に難くない。〔中略〕ゴルトンの優生学は人類の遺伝的な改良を目的としていたが、何が健全で何が劣悪であるのかという基準が曖昧であるために、やがてゴルトンの意図を離れて、「劣悪」な遺伝子を抑えるという名目で人種差別と移民の制限を正当化していく理論的根拠となってしまう。（光富 130）

ここでは優生学によって付けられた階級は、人の成功の有無や優劣は遺伝的に決定しているという思想の元、上流階級の特権性を正当化する根拠となっている。ここからはトム、ニックらの歪んだ階級意識は階級の差がそのまま人間の優劣に符号する優生学から発生していたものであることが分かる。しかしニックは、ギャツビーの信頼によって成功をもたらそうとする意志が階級の前に打ちのめされる姿を目にした。

ニックは第7章において、トムに対し“Human sympathy has its limits”「人間の共感できる能力には限りがある」（129）と述べる。ここからはニックがギャツビーに共感し、明確にトムへの否定的感情が表されていることが分かる。それはギャツビーが敗北したことを契機に、ギャツビー達の想像力がトム達に敗北する様子をグロテスクに感じ、自分が無意識に受け入れていた優生学、上流階級の優越さが存在しないことをニックが感じ得たということではないか。

また、階級によって人間が規定されることはないという人間への信頼と階級への欺瞞をニックがギャツビーから得たことは、この物語がニックの書いた小説であるという構成であることから伺える。ギャツビーの敗北によって、ニックは灰の谷の住人ウィルソン、マートルにも目を向け、彼らの持つギャツビーと同様の資質を彼らにも見出し小説として書き出すことが出来た。それはニックが、ギャツビーの敗北によって階級というものに向き合えたということであり、ギャツビーから、階級で人間を規定することは出来ないという人間の可能性への信頼を学び、あらゆる人に目を向ける

ようになったということでもある。第九章における彼の“but that’s no matter—tomorrow we will run faster, stretch out our arms further . . . . And one fine morning—”「でもまだ大丈夫。明日はもっと速く走ろう。両腕をもっと伸ばそう。…そうすればある晴れた朝に——」(171)とは、真に階級を意識したニックが改めて自己信頼の精神の元で生きるという宣言であり、それはフィッツジェラルドの人間への信頼であり、そのような人間によって構成されるアメリカへの信頼である。

## 結論

本論文では、『グレート・ギャツビー』における階級と、ギャツビー達の敗北がどのような意味合いを持つのかという問いかけを三章に分けて論じた。第1章において当時のアメリカにおける格差の拡大を確認しフィッツジェラルドの感じていた格差感情について論じ、それが『グレート・ギャツビー』の執筆のテーマにもなっていることを論じた。第2章ではギャツビー、マートル、ウィルソンがそれぞれどのような敗北を受けたのかについて論じた。第一にギャツビーが打ちのめされる階級にワスプではないという血筋の階級が存在していることを述べ、第二にウィルソンが翻弄された経済的な格差が人間の格差となり、殺人を肩代わりさせられるという悲劇に繋がったことを論じた。第三にマートルが、経済的な格差はもちろん、女性というジェンダー的な階級の前に抑圧されてしまったことを論じた。そして彼らが共通して持つ想像力の強さが、経済的、階級的な壁に阻まれて敗北してしまうことに注目した。第3章では第一にニックが自身の階級意識をどのようなものなのかについて確認し、第二にギャツビーたちとの出会いによる変化と、ギャツビーとニックの共通点として自己信頼の高さに着目し、彼らの共通点がニックの歪んだ階級意識の変化をもたらしたと結論付けた。第三に上流階級の価値観の背後に存在する優生思想を明らかにし、血筋と能力が同一視される価値観を変化させるために、フィッツジェラルドは人間個人への深い共感と信頼が必要なのではないかと訴えていると結論付けた。階級を否定することで誕生したアメリカにおいても、階級の存在は確かに存在する。フィッツジェラルドはそれに失望するだけではなく、アメリカ人として建国の理念に我々は立ち返ることが出来るというアメリカへの信頼もまた描き出している。

## 引用文献

F. Scott. Fitzgerald. *The Great Gatsby*, Penguin, 2000.

有賀夏紀『アメリカの20世紀（上）1890年～1945年』中央公論新社、2002年。

今村盾夫「マートル・ウィルソンの悲劇——ギャツビーの陰で」『英米文学評論』第48号、2002年、55-79ページ。

ターンプル、アンドルー『完訳フィッツジェラルド伝』永岡定夫・坪井清彦訳、こびあん書房、1988年 [Turnbull, Andrew. *Scott Fitzgerald*. The Bodley Head, 1962].

光富省吾「ヘミングウェイと階級」『アメリカ文学における階級格差社会の本質を問う』田中久男監修、早瀬博範編著、英宝社、2009年。

フィッツジェラルド、スコット『グレート・ギャツビー』村上春樹訳、中央公論新社、2006年。

リーハン、リチャード『「偉大なギャツビー」を読む——夢の限界』伊豆大和訳、旺史社、1995年 [Lehan, Richard. *The Great Gatsby The Limits of Wonder*. Twayne, 1995].

渡辺利雄『講義アメリカ文学史—東京大学文学部英文科講義録——第二巻』研究社、2007年。

## *Beloved*における濃すぎる母性愛

長瀬 歩優

### 序論

トニ・モリソン (Toni Morrison) は1993年に黒人女性作家として初めてノーベル文学賞を受賞したアメリカ人作家である。彼女は黒人が差別されるアメリカ社会に生きる黒人女性をテーマに10作以上の小説、その他エッセイ、児童書などを残した。本論文で取り上げる『ビラヴィド』 (*Beloved*) は1987年に初版発行されたモリソンの代表作で、1987年にピューリッツァー賞を受賞し、映画化もされた作品である。

作品は1873年のアメリカ、オハイオ (Ohio) 州のシンシナティ (Cincinnati) を舞台としており、そこに住む主人公たちのもとで起こる問題と、彼女らの過去の回想が複雑に繰り返される物語である。

主人公はセサ (Sethe) という元奴隷の女性で、彼女は南部のスイートホーム農園 (Sweet Home) で奴隷として働いていた。彼女はそこでハーレ (Halle) という同じ黒人奴隷と結婚し、2男1女の子供を設ける。その後もう1人娘を身ごもっているときに、他の奴隷たちとともに農園からの逃亡を計画し、先に子供たちを舞台であるシンシナティに住む義母ベビー・サッグス (Baby Suggs) へと送る。しかし、その後の逃亡は上手くいかず、セサは身重の体で一人義母の下へと逃亡する。途中で生んだ娘デンヴァー (Denver) とともに義母の住むブルーストーン通り (Bluestone Road) の124番地へとたどり着いたセサは、子供たちと再会し、義母の下で暮らし始める。しばらくの間平穏に暮らすセサ達であったが彼女たちを追ってきた白人に見つかり、子供を奪われまいとするあまり、セサはまだ幼かった長女を殺してしまう。

自身の子を殺したセサは共同体の人々から反感を買い、セサ自身も周囲を拒絶した。そのため物語が始まる1873年まで18年間、彼女たちの暮らす124番地は共同体から隔絶する。18年の間に124番地ではセサが殺した赤子の幽霊が害をなすようになり、セサの息子2人であるビューグラー (Buglar) とハワード (Howard) は早々に家出、義母のベビー・サッグスも亡くなってしまう。

そんな124番地に、セサのスイートホーム農園での旧友であるポールD (Paul D) が訪れる。彼は赤子の幽霊を追い出しセサたちとともに暮らし始めるが、3人の暮らしが始まって間もなくビラヴィド (*Beloved*) と名乗る謎の若い黒人女性の登場により、再び124番地は災厄に見舞われてしまう。まるでセサの娘であるかのように124番地に住

み着いたビラヴィドをセサとデンヴァーは受け入れる。しかし、ポールDは彼女を受け入れられず、セサの子殺しを知ったことをきっかけに124番地を去り周囲に住む黒人たちの共同体で暮らし始める。

124番地に残されたセサは、ビラヴィドを自身が殺した娘であると確信し、彼女に執着するようになる。セサとビラヴィドの異常な共依存関係をそばで見続けたデンヴァーはついに3人のみの生活に限界を感じ、仕事を得ようと初めて124番地から離れ、共同体に助けを求める。

デンヴァーの行いによって、長い間共同体から隔離していた124番地は再び共同体の中に組み込まれる。共同体の女たちが追い出さんと行動を起こし、ついにビラヴィドは124番地から消え失せる。セサはビラヴィドが消えたことにより生きる気力を失い、ベビー・サグスのように寝台の上で静かに死んでいこうとする。そして、物語はそんなセサのもとを再びポールDが訪れ、彼女を生かそうと言葉をかける場面で終わる。

『ビラヴィド』(*Beloved*)の主人公であるセサは白人たちから守るために、子供を殺してしまう。この行動は自身が経験した奴隷としての人生を子供には経験させたくないという母親としての深い愛情からの行為に見える。しかし、セサの行いは同じく奴隷時代を生き抜いた周囲の黒人たち、守ろうとした子供にさえ受け入れられないものであった。セサの持つ母性愛には異常性があったということである。本論文ではセサの母性愛には子供に対する純粋な愛情だけではなく、「母親であること」への執着が関係していると考えられる。これからセサの母性愛の度が過ぎている点について説明し、その母性愛がどのように生まれ、そして最終的にどのように解放されていくのか考察していく。

## 第1章 セサの濃すぎる母性愛

セサはスイートホーム農園から逃亡後、自分たちを追ってきた白人たちから子供を守ろうとし、結果的に自身の娘を殺害してしまう。セサのこの行動は白人に奴隷として所有されてきたセサが、子供には自身と同じ経験をさせたくないという思いから行われたものである。しかし、作中でポールDが彼女の母性愛について“Your love is too thick” (193) と述べているように、彼女の愛情やそれに起因する行動は、周囲の人々にとって度を越しており受け入れられるものではない。では、彼女の母性愛はどのように濃すぎるのだろうか。

ポールDが124番地に住み始めた当初、彼を嫌うデンヴァーが失礼な発言をする場

面がある。娘の代わりに詫びようとしたセサを、ポールDはデンヴァー自身に責任をもって謝らせるべきだと止める。しかし、セサは“Then I’ll see that she does” (54) と述べているように、デンヴァーの意志ではなく彼女の管理の下デンヴァーに謝罪させようとする。そして“Excuse me, but I can’t hear a word against her. I’ll chastise her. You leave her alone” (54) と、セサはポールDが自身の子育てに関して口を出すことを拒絶している。

以上の行動から、セサは娘のデンヴァーを過度に守り、行動を管理しようとしていることが分かる。デンヴァーは18歳であり、ポールDが述べるように大人として自分の言動に責任を持てる年齢と言えるだろう。デンヴァーはもう自分で責任を取るべき大人で、いつまでもセサが守ってやることはできないとポールDは告げるが、セサはこの意見を受け入れない。“I’ll protect her while I live and I’ll protect her when I ain’t” (54) という発言からは、セサの子を守る気持ちが現実的ではないほど過剰であることが窺える。

彼女のこの行動は真に子供のためを思った行動とはいいがたい。親の役割には、子供を守るだけでなく、子供を一人前の大人として育て上げることも含まれるからだ。セサは母親として子供を育て上げるのではなく、永遠に自身の庇護下に置こうとしている。

セサの持つ母性愛に特異性を感じるのは、過剰な愛情であるということだけでなく、子育てに関するどんなものにも過度な執着をみせているということにある。

“After I left you, those boys came in there and took my milk. That’s what they came in there for. Hold me down and took it. I told Mrs. Garner on em. She had that lump and couldn’t speak but her eyes rolled out tears. Them boys found out I told on em. Schoolteacher made one open up my back, and when it closed it made a tree. It grows there still.”

“They used cowhide on you?”

“And they took my milk.”

“They beat you and you was pregnant?”

“And they took my milk!” (19-20)

上記はセサがポールDに、当時スイートホーム農園で指揮を執っていた先生 (Schoolteacher) とその生徒たちにつけられた背中への傷について話す場面である。ポー

ルDは身重であったセサが傷つけられたことに注目している。しかし、二度も繰り返している点から分かる通り、セサは自身が鞭で打たれたことより母乳を盗まれたということにひどく憤っている。母乳を盗られた場面の描写はまるで彼女が性的暴行を受けたかのように凄惨だ。しかし、自身ひどく傷つけられたにもかかわらず、セサが最も憤りを覚えているのは母乳を盗まれたということである。実際、彼女は娘の墓標に文字を刻んでもらうために石工に10分間身体を差し出す。セサにとって母乳とは、自分の身体以上に大事なもの、又はその象徴であり、それを盗られるということは性的暴行以上の非道な行いなのだ。

「子供を安全なところにつれて行き、白人から守る」という名目で行われたセサの子殺しが、実際は子供たちにさえ軽蔑され恐れられる行為であったことはデンヴァーの記憶から明らかである。デンヴァーは幼い頃通っていた学び舎でネルソン・ロード (Nelson Lord) という少年に尋ねられたことにより、セサが姉を殺したことを知る。“She was too scared to ask her brothers or anyone else Nelson Lord’s question because certain odd and terrifying feelings about her mother were collecting around the thing that leapt up inside her” (121) この部分からデンヴァーは子殺しの疑惑を持つ母親に対して、恐ろしいと感じていることが分かる。

そして兄二人の感情についても、デンヴァーの記憶から推測することができる。次の引用は、作品の第2章にあるデンヴァーの独白だ。“She missed killing my brothers and they knew it. They told me a die-witch! stories to show me the way to do it, if ever I needed to” (242)。この部分からは、兄たちもセサが娘を殺し自分たちをも殺そうとしたことを知っており、セサを魔女として嫌悪していたことが分かる。つまり、セサの子を殺すという行為は「子供を守る」という母性愛からの行いと正当化されつつも、子供の意志を尊重したものではなく、彼らの命を自分の所有物のように一方的に扱っているのである。

では、子供や母乳はセサにとってどのような存在なのだろうか。セサは自身の子供について次のように考えている。“The best thing she was, was her children. Whites might dirty her all right, but not her best things, her beautiful, magical best thing—the part of her that was clean” (296)。この部分には、セサの強烈な自己嫌悪と子供への所有の意識が見える。白人に支配されてきたセサは、自身を汚れていると考えている。そして、彼女が自分の持ちものとして考えている子供たちは、彼女にとって唯一白人の蹂躪から守ってきた清らかな存在である。つまり、セサにとって子供たちとは、汚れた自分の唯一愛情を持てる存在なのだ。母親から子供に与えられる母乳は、母子の繋がり象徴と

もいえる。セサにとって母乳とは、自分と子供たちを繋ぐものであり、それを盗られるということは母子の繋がりを奪われるような感覚だったのではないだろうか。だからこそセサは、母乳が白人に盗られたことに尋常でない怒りを覚え、また、子供を殺してまで白人からの侵略を防ごうとしたのだ。このことから、彼女の濃すぎる母性愛とは、白人に汚された自分が唯一持っている清らかな存在に対する所有欲と言い換えることもできるだろう。

同時に、子供はセサにとって自分のもっとも清らかな存在、母乳は母子のつながりの象徴であると同時に、セサ自身の存在価値を支えるものであると言える。セサの子殺しを知ったポールDとセサの会話中、セサは子供たちを農園から逃亡させたときの気持ちを話している。“It was a kind of selfishness I never knew nothing about before. It felt good. Good and right. I was big, Paul D, and deep and wide and when I stretched out my arms all my children could get in between” (190)。ここで彼女は自分の大きさ、子供たち全員を包める腕の長さといった自分自身について初めて発見し、自分に価値を見出したように述べている。この部分から、この発見を得る以前の奴隷として生きていたセサは自分自身という存在がどういうものか知らず、自分自身の存在価値を認識していなかったことが分かる。

ここで言う自分自身とは、アイデンティティと言うこともできる。しかし、それだけではない。セサが述べる自分の存在価値の発見は、「人間として」だけでなくさらに根本的な「生き物として」についての認識である。これについては第2章でさらに考察していく。

彼女が発見した自己の存在価値とは、子育てに関することに過剰な執着を見せている姿から、「母親」としての役割であると言える。生まれたときから奴隷として白人に所有されていた彼女は、何かを自分のものとして所有することは許されず、自分自身さえ所有することができなかった。それが子供を産み、その子供たちを白人から逃がすことで、初めて白人の所有物ではない「セサの子供」持つことができたのである。白人の支配から外れた彼女が唯一持っていたのは「子供を産み育てる力」と彼女が白人の手から逃がした「子供たち」だ。ここから彼女が発見した価値のある自分の姿は、「母親」と推測できる。“Good and right”と上の引用にもあるとおり、初めて認識した自身の価値は、心地よく離しがたいものだった。だからこそ彼女は自身を母親とあらせる子供や、母としての能力の象徴のような母乳に対して強い執着をみせたのではないだろうか。

セサの濃すぎる母性愛には、母から子供への純粋な愛情だけでなく、自分の持ち



物である子供たちや初めて得た自身の存在価値など、自分自身への所有欲が多分に含まれている。彼女にとって自分の子供とは、白人に汚された自分の唯一持っている清らかな存在であり、彼女の「母親」という自身の価値を支えるものだ。母親であることはもはや、彼女の唯一の存在意義となってしまうのである。セサは子供を純粹に愛している。しかし、それ以上の自己への意識が複雑に絡まり、彼女の母性愛は濃すぎるものになってしまうのだ。

## 第2章 濃すぎる母性愛をつくったもの

第1章では、セサの持つ母性愛がどのように「濃すぎる」のかについて述べ、彼女の母性愛には自分自身への所有欲が含まれていると考察した。彼女が他の自己をもつこともできず「母親であること」に固執するようになったのには、奴隷時代を生きた彼女の過去が複雑に関係している。本論では、セサの過去がどのように濃すぎる母性愛をつくったのか、セサの過去を幼少期、ガーナー氏が生前のスイートホーム農園時代、「先生」が指揮を執るスイートホーム農園時代の3つに分けて考えていく。

まずはセサの幼少期に注目する。この時代からは彼女の母子関係への強い憧れが窺える。彼女の母親は奴隷船でアフリカから連れてこられた奴隷だった。一日のほとんどを田園で働かされる母親たち奴隷は、子供と過ごす時間はほとんどない。セサも自身の母親について“*She didn't even sleep in the same cabin most nights I remember*” (72) と述べており、彼女が母子関係において母親に愛情ととれるものをほとんど何も与えられなかったことが分かる。セサが母親からしてもらった唯一のことは、自身の母親の見分け方だった。奴隷船で連れてこられた母親は奴隷を称する焼印を胸の下に入れられており、母親を見分ける証としてそれを幼いセサに教えた。これはセサにとって母子の絆を示す唯一の記憶だが、その背景を知らずに母と同じ印を求めて叩かれたことで、母親からの拒絶の記憶にもなっている。

母乳に対する過度な執着も、幼少期の記憶が関係している。彼女は母親の代わりに、ナン (Nan) という赤子たちの世話を担当していた片腕の女奴隷の母乳で育った。しかし、母乳を与えられる順番は白人の赤子が優先されていたため、セサが十分に母乳を飲めたことはなく、時には母乳が余っていないときもあった。セサは母親の愛情ととれるものを実母から与えられず、代わりとしてナンから与えられる母乳ですら十分に与えられなかったのである。セサは自身の経験について次のように独白している。“*I know what it is to be without the milk that belongs to you; to have to fight and holler for it, and to*

have so little left” (236)。この引用から、母乳とは幼少期の彼女にとって強烈な「不足」の記憶、その象徴であると分かる。母親からの愛情「不足」と母乳の「不足」、この類似点から、セサにとって母乳とは母親の愛情の象徴であると言える。第1章の考察と合わせて、セサにとって母乳は母親の愛情と母子の繋がり2つを象徴しているのだ。だからこそ、セサは母乳に対し過剰な執着を見せるのである。

以上の記憶から2つのことが言える。1つ目は、幼少期の愛情不足が反動として彼女の母子関係の誤った理解に繋がっているということだ。彼女は幼少期に母親から注がれるべき愛情をほとんど受け取れずに育った。そして母親になってからのセサは、自分が与えられなかったもの、与えてほしかったものを母親の立場から子供に与えようとしている。同時に第1章で取り上げたデンヴァーへの過度な庇護の様子からも分かるとおり、子供にも自分の管理下にあることを求めている。これは母親からの愛情不足がセサの中での「母子の理想」へと転じ、その理想をセサが実現しようとした結果だ。

セサのもとに帰ってきたビラヴィドについて、セサは“a good girl, like a daughter, which is I wanted to be” (240) と思う。このことから、セサにとって理想の子供とはどんなことがあっても母を理解し、母の傍でその管理下にある子だと分かる。そして、理想の母親とはセサがそうあろうとしたように、全身全霊の愛情を子に注ぎ、子供を庇護下に置く母である。

なぜこのような管理下にある子供と支配する母が「理想の母子」として理解されてしまったのか。これについては、生まれてからずっと奴隷として白人に管理されてきたという過去が関係すると考える。母親から「庇護」を受けられなかったセサは、それがどういうものなのか分からない。彼女が知っていたのは、「所有し管理する白人」と「所有され管理される奴隷」の関係ばかりである。そのため、白人と奴隷の支配関係を無意識に「母親の庇護」の模範としてしまったのではないだろうか。それが分かるのが、ガーナー夫人とセサの関係だ。セサは“like I would have tended my own mother”

(237) とあるように、献身的に病に臥せるガーナー夫人の世話をした。ガーナー夫人はセサに知らない言葉を教え、彼女の結婚を認め、お祝いの品に水晶のイヤリングを贈った。彼女たちの関係は白人と奴隷の主従関係を超えて、疑似的な母子関係にさえ見える。このような経験から、セサはどういうものか知らない母親の「庇護」を子供に与えようとした際に、自分の経験してきた中で母親の「庇護」と似て見えた白人との関係を理想的な母子関係として無意識にあてはめたのだ。しかし、母子のようであったとしても、セサとガーナー夫人の関係は白人が黒人奴隷を所有し管理する関係の

域を出ることはない。白人からの「管理」を母親からの「庇護」に当てはめたセサは、その誤った理解を母子関係の理想として、子供を所有し管理する母になる。

2つ目に言えることは、幼少期の記憶がセサの白人に対する強い嫌悪と拒絶のもとになっているということだ。彼女の幼少期は、本来受け取れるべきものを白人に奪われた時代だ。母親がセサと過ごすことができなかつたのは、奴隷として労働しなければならなかつたからである。そして、最後には白人の支配する奴隷田園で首を吊られて死ぬ。母乳も白人の赤子が優先されたがために、セサは十分に受け取ることができなかつた。以上の経験は彼女の中にある白人全体に対する強い嫌悪と拒絶の根源となる。スイートホーム農園のガーナー夫妻やエイミー・デンヴァーといった比較的優しい白人との出会いで彼女の中の白人全体に対する嫌悪は一度緩和される。「多様な白人がいる」という意識が生まれるのだ。しかし「先生」たちによって母乳が奪われ、最愛の子供たちの自由も奪われそうになったことが、彼女の中での「白人＝奪うもの」という意識を再熟させる。結果、作品の後半でデンヴァーに仕事を紹介するために124番地に訪れたエドワード・ボドウィン(Edward Bodwin)を見てすぐに攻撃したように、相手が白人であるだけで強い拒絶と過剰な防衛の姿勢を見せるようになるのだ。

つぎに、ガーナー氏が指揮を執っていたスイートホーム農園時代について考察する。この時代ではセサの自己の確立と所有への強い願望が生まれている。

まずはセサの自己の確立について考える。人が成長とともに確立し多面化させていくアイデンティティは、白人に心身ともに所有されてきた奴隷たちの中では形になることができない。それどころか、アイデンティティ以前に「人」としての在り方さえ黒人奴隷たちの中では揺らいでしまう。それは自分自身を形作るための身体も意志も白人の所有物とされているために、自分のものとして認識できないからである。そして、自身の全てを所有する白人が彼らを人ではなく「所有物」「動物」として扱うからである。

奴隷たちは自身の体を自分のものとして扱うことは許されず、身体も子供を産むという生き物としての能力も白人の所有物として一方的に扱われる。そして“*Slaves not supposed to have pleasurable feelings on their own*” (247) とあるように、奴隷は自分の心でさえも自分自身で所有し、動かすことは許されない。つまり、奴隷たちは自身の身体も、能力も、心も何一つとして所有することはできなかつたのだ。

人生のほとんどを奴隷として生き、身体も心も白人に蹂躪されたベビー・サグスは“*having never had the map to discover what she was like*” (165) と作中で記述される。このように、心身ともに自分を形作るあらゆるものを白人に所有された奴隷たちは、

自己を認識することも、確立することもできない。

しかしガーナー氏が所有していたスイートホーム農園では、奴隷たちは意志を持って行動できる一人の「人」として扱われていた。“And so they were: Paul D Garner, Paul F Garner, Paul A Garner, Halle Suggs and Sixo, the wild man” (13) と作中でポールDがスイートホーム農園での記憶を思い返している。彼らはベビー・サグスの後に買われてきたセサに性行為を強引に迫ることはせず、彼女が相手を選ぶまで待った。これは彼らが性欲という生き物の持つ本能のまま行動する「動物」ではなく、理性をもって欲望を抑えられる意志を持った「人間」であったということを表している。少なくとも、ガーナー氏生前の農園の奴隷たちは、自らを「人」として認識していた。

他の奴隷たちと同じく、セサもスイートホーム農園にてある程度意志を持って行動する自由が認められる。自分の身体を自分の考えで動かすこと自由を得たセサの中で、「所有」への欲望が起こる。

セサのスイートホーム農園時代の仕事について、セサは次のように思い返している。“she who had to bring a fistful of salsify into Mrs. Garner’s kitchen every day just to be able to work in it, feel like some part of it was hers, because she wanted to love the work she did, to take the ugly out of it, and the only way she could feel at home on Sweet Home was if she picked some pretty growing thing and took it with her” (27)。ここからは、セサの「所有すること」への欲望が伝わる。「自分が」持ってきた植物を持っていくのは、「ガーナー夫人の」台所の一部を「自分のもの」として感じるためである。そして、「自分の場所」をつくることは、醜いものを取り除く行為でもあった。この醜いものというのは、彼女が白人の所有物である事実であると考えられる。第1章でも述べたように、自分を白人に「汚された」ものとして嫌悪する彼女にとって、白人に「所有されている」という事実は「醜い」ものであった。そのため自分の場所を設けることによって、白人の所有物である自身の状況を忘れたかったのだ。以上のことから、彼女は白人に「所有されること」への嫌悪、そしてその対として「所有すること」に対する強い憧れをもっていたと分かる。

所有する自由がなかった奴隷たちは「自己」を持つことも、認識することもできなかった。ここから逆説的に、何かを「所有すること」が「自己をもつこと」に繋がるということが出来る。つまり、「所有したい」という彼女の欲望と、それに起因する行動は、スイートホーム農園という特異な状況下によって叶えられ、彼女の自己確立に繋がるのである。

彼女の自己確立を感じる出来事の一つがハーレとの結婚だ。結婚によってセサはハ

ーレという「自分の」夫を持ち、「ハーレの妻」という一つの自己を確立する。しかし、当時の奴隷の結婚は、奴隷の主人がその結婚を容認するだけのものだった。セサはこれでは物足りないと考え、結婚式という正式な証明が必要だと考える。その希望はガーナー夫人に許可されなかったが、セサはあきらめなかった。ここでセサは自己の確立を感じさせる主体的な行動を起こす。仕事場から少しずつ布地を盗ってきて、結婚式のドレスをつくったのである。ドレスをつくったセサはハーレと夜中のトウモロコシ畑にて、内密に疑似的な結婚式を成立させる。成し遂げたセサは次の日、ガーナー夫人に結婚の祝いとして水晶のイヤリングを貰う。そしてその後、ハーレとの間に2男2女の子が生まれる。このように、セサは「夫」「ドレス」「イヤリング」「子供」など、少しずつ自身の持ち物を増やしていく。持ち物が増えることでセサは「妻」「母」といったアイデンティティを確立していくのだ。

以上のようにガーナー氏が指揮を執っていたスイートホーム農園時代は、奴隷たちが「人」として扱われた。「人」として扱われたセサは白人に「所有されること」に嫌悪を抱き、自分も「所有」への欲望を持つ。そして、自分の夫や自分の子供たちを持つことができたセサの中で、「妻」や「母」といった複数のアイデンティティが生まれる。

しかしながら、彼らの「人」としての自由はあくまでスイートホーム農園に限定したかりそめに過ぎない。農園の一步外に出てしまえば、奴隷たちは何も持たない白人の「所有物」「動物」として扱われる。「人」から「動物」に貶められることで、彼らの人間性そのものが否定されるのが、「先生」に支配されたスイートホーム農園時代だ。

セサの「先生」に関する記憶の中で、母乳を盗られた記憶とともに特に鮮明に残っているのが、「先生」達による奴隷の記録行為である。これはセサにとって「人」であるということを奪われる行為だった。「先生」が生徒たちに奴隷たちの特徴を分類し記録させている場面で、「先生」は次のように発言する。“No, no. That’s not the way. I told you put her human characteristics on the left; her animal ones on the right” (228)。この発言からも、「先生」らがセサ達奴隷を「人」ではなく「奴隷という白人が所有する生き物」として考えていることが分かるだろう。セサは偶然この場面を目撃し、初めて自分が「人」として扱われていないこと、「動物」のように記録されていることを知る。動物のように記録されることは、セサにとって自分が「人」であるという自己の根本を否定されることであった。このような記録だけでなく、轡や鞭によって奴隷たちの人間性は否定される。

白人について彼女はビラヴィドに次のように説明しようとしている。“That anybody

white could take your whole self for anything that came to mind. Not just work, kill, or maim you, but dirty you. Dirty you so bad you couldn't like yourself anymore. Dirty you so bad you forget who you were and couldn't think it up” (295)。このように、白人に身も心も、人間性さえも蹂躪され、汚されてしまったセサは、自分自身に対する愛情を持つことができなくなり、自分自身の存在価値を見失う。第1章で述べたように、子供たちと自身の逃亡を成功させた際、つまりは白人の所から外れたとき、セサは初めて自分の身体を自分の意志で動かすこと、所有できる「自己」を自覚する。しかし、そのころにはセサに残されたのは「子供たち」と彼らを生かす「母乳」、つまり「母親であること」だけであり、それ以外の自分自身にセサは価値を見出すことができない。その結果、最良のものである子供たちの「母親あること」が彼女の唯一の価値ある「自己」になり、自身が汚れていると考えるために、それ以外の存在価値を自分自身に見出すことができなくなってしまうのである。

本章では、セサの過去を3つに分けて考察し、彼女の「母親であること」への執着がどのようにして生まれたのか考察した。奴隷であるがために母親からの愛情を得られず、母親の愛情に対する熱望と、母子関係の理想への誤った理解を抱く幼少期。「人」として扱われ夫や子供を持つことで、本来奴隷として生きる際には持ちえない主体的な「自己」を形成しかけたガーナー氏のスイートホーム農園時代。白人による蹂躪で自己愛をなくし、「母親であること」にしか自分の存在価値を見出せなくなった「先生」のスイートホーム農園時代。このような奴隷としての人生を経て、セサの濃すぎる母性愛や、「母親であること」への逸脱した執着は完成する。

### 第3章 濃すぎる母性愛からの解放

第1章と第2章では、セサの濃すぎる母性愛の内容と成り立ちについて考察してきた。彼女の濃すぎる母性愛には、子供への純粋な愛情だけでなく、「母親であること」への執着が多分に含まれている。「母親であること」は奴隷時代を生きた彼女に残った唯一の存在価値であり、自己嫌悪を抱える彼女はそれ以外に自身の価値を認めることができなくなってしまう。しかし、最後の場面ではセサが自己愛を取り戻し、自身の濃すぎる母性愛から解放される未来が示唆される。これはどのようになされたのだろうか。本章では、濃すぎる母性愛からの解放に着目し、どのように解放に向かっているのか考察していく。

セサの濃すぎる母性愛からの解放には、18年間もの間隔絶していた周囲に住む人々、

共同体との交流の回復が関係していると考ええる。これについて論じるために、まずはセサ達の住む124番地周辺の共同体について説明する。

124番地が位置するオハイオ州シンシナティのブルーストーン通りにある共同体は、逃亡してきた元奴隷を多く含む黒人たちの共同体だ。そこでは住民たちがお互いに新しい逃亡者の世話、逃亡者を追ってきた白人からの避難、食べ物の分け合いなどをするのが常であった。この様子から、この共同体は集団としての意識が強く、「お互いに助け合う」といった相互関係が主軸の共同体であると言える。

この共同体の中心だったのが124番地であり、そこに住むベビー・サッグスである。自由の身になった彼女は説教師となり、開拓地 (the Clearing) にて人々に説教を行った。

説教は開拓地の平たい岩の上で祈りを捧げたベビー・サッグスが、集まった子供、男性、女性たちに笑い、踊り、泣くように言い、彼らが自由に身体と感情を動かすことから始まる。自由に身体を動かし、自由に感情を表現することで、自分自身を自分で持つ感覚を取り戻すのだ。そして、開拓地に集まった人々が疲れ果てるまで心と身体を解放した後、彼女は次のように説教を始める。“in this here place, we flesh; flesh that weeps, laughs; flesh that dances on bare feet grass. Love it. Love it hard” (104)。このように始まった説教で彼女は人々に自己愛を説く。白人からの支配で自分の価値を認識することも、愛することもできなくなった黒人たちに、自分で自分を愛すること、自分の命そのものが最も尊いものであるということを伝えるのだ。言葉での説教を終えたベビー・サッグスは、開拓地に集まった人々全員による合唱の中、言葉にできない思いを、今度は身体を使い踊って表現し始める。そして、“Long notes held until the four-part harmony was perfect enough for their deeply loved flesh” (104) とあるように、彼女の言葉と身体を使った説教で、共同体の人々は一つになるのだ。このように、白人からの蹂躪で深く傷ついた黒人たちは開拓地にて、皆で踊り、皆で泣き、笑い、皆で歌うことでその傷を癒すのである。この点から、ブルーストーン通りに住む黒人の共同体が集団としての意識を強く持ち、集団でいることで辛い過去を慰める性質を持っていたことが分かる。そしてこの性質は、ブルーズやゴスペルといった黒人特有の音楽にも表れており、共同体というより、黒人全体の文化的特性であると言えるだろう。

セサは124番地に着いてから娘殺しの事件が起こるまでの28日間、つまり共同体の一員として過ごした日々を次のように振り返っている。“Days of healing, ease and real-talk. Days of company: knowing the names of forty, fifty other Negroes, the views, habits; where they had been and what done; of feeling their fun and sorrow along with her own, which made it

better” (111)。この部分から、共同体の人々は自身が生きてきた奴隷としての人生を語り合い、共有することで奴隷時代に受けた傷を癒していたということが分かる。そして、セサも共同体と隔絶するまでは、共同体での交友によって心身の傷を癒していたのだ。

しかし、セサ達の無事を祝う会が行われたことをきっかけに、共同体と124番地の人々は隔絶する。ベビー・サグスは意図していなかったが、祝賀会が90人規模の盛大なものとなってしまったために、共同体の人々に度が過ぎていと反感を買うのだ。

「助け合う」といった相互関係や、集団としての意識が強いこの共同体の人々の目には、ベビー・サグスたちのお祝いは身の丈に合わない、盛大すぎるものとして映ったからである。124番地の人々に反感を持った共同体の人々は「先生」が来たことを知らせず、母親による娘殺しの事件は起こってしまう。

セサは連行される際、全く後悔や罪の意識を見せない。このセサの態度を人々は尊大だと考え、セサと共同体の決別は決定的なものとなる。この時セサが共同体との決別を選ぶのは、彼女が共同体の中で自身の存在価値を見つけられないためだ。それまでの人生で、「母親であること」以外に自身の存在価値を見出せなくなったセサは、共同体で癒されても、植え付けられた自己嫌悪によって自身の価値を新しく見つけることができないのである。したがって、「母親であること」以上に自身の存在価値はないと考えるセサは、共同体での慰めを捨て、「母親であること」を保持するために行動するのである。結果、セサは共同体による辛い過去への慰めを受け取れなくなり、彼女の回復は止まってしまう。

以上で説明した共同体の性質や、共同体で過ごしたセサの記憶から、濃すぎる母性愛からの解放に必要なことを推測することができる。かつて共同体の一員として過ごしていたセサは、共同体にて、奴隷時代の辛い記憶から少しずつ心と身体が癒される日々を送った。セサの濃すぎる母性愛は、彼女の奴隷としての人生が作り出したものであるため、共同体の人々との交流は濃すぎる母性愛からの解放に必要なものであると言える。

共同体の人々との交流をもう少し具体的に考える。共同体ではお互いの考え、習慣、過去を語り合っていた。つまり、思いや記憶を共有するのである。そして、語り合い、共有することでセサは癒されていった。藤平育子は、著書の『カーニヴァル色のパッチワークキルト』において以下のように述べる。「つまり、「物語る」ことによって記憶を繰り返し蘇生する過程で、人々は真に癒される。それは、個人の苦悩の記憶が「物」あるいは「テキスト」として他者に共有され、やがて集団としての記憶に再構築され



る時である」(204)。この部分からも分かる通り、セサが過去の呪縛から逃れ、濃すぎる母性愛から解放されるためには、自身の辛い記憶を他者に語り、共有する必要があるのだ。

そしてもう一つセサが回復しなければならないものが、自己愛である。彼女が「母親であること」に逸脱した執着を持つようになった要因の一つは、白人支配によって植え付けられた大きな自己嫌悪だ。この自己嫌悪によって彼女は「母親であること」以外の存在価値が認められなくなり、自分を母親で在らせる「子供たち」に執着するのである。したがって、彼女が「母親であること」への執着から解放され、新しい自己を認識するようになるためには、自己愛を回復しなければならないのだ。

以上において、セサが濃すぎる母性愛から解放されるためには、共同体との交友を再開し、他者と語り合うことで辛い記憶を共有すること、そして、自己愛を取り戻すことが必要であると述べた。このことを踏まえ、作品でセサの濃すぎる母性愛がどのように解放に向かっていくか考察する。

セサの濃すぎる母性愛からの解放は、彼女の娘デンヴァーが共同体に助けを求めに行ったことから始まる。それまでの18年間、124番地と共同体は分断し、お互いに嫌悪と無関心を続ける関係であった。しかし、デンヴァーが幼少期に通っていた学び舎の先生レディ・ジョーンズ(Lady Jones)に仕事の紹介を求めに訪れたことをきっかけに、124番地と共同体の交流は再開する。レディ・ジョーンズに124番地の窮状を伝えたことで、その話が瞬く間に共同体に伝わり、人々から食料の支援を受けられるようになったのだ。そして「食料が届く」、「お礼を言いに行く」という相互のやり取りが続き、124番地は少しずつ共同体の一部として再度組み込まれていく。この結果、共同体による救済を受けるに至る。

共同体に再び組み込まれたことにより、124番地の状況を知った女たちが救済へと動く。しかしながら、この救済は必ずしも善意で行われたものではない。セサの状況を聞いたとき、共同体の人々の反応、救済への賛否は様々であった。女たちがセサを救済しようと行動を起こしたのは、個人の好奇心や欲望が関係している。セサに救済の手を差し伸べることを他の女たちに納得させたエラ(Ella)という黒人女性も、救済について“opportunity to measure what could very well be the devil himself against ‘the lowest yet’”(302)と考えていた。父と兄に性的暴行を受けていた日々を「最低」と位置づけあらゆる物事を図っていた彼女は、セサに対する同情だけではなく個人的な好奇心から救済を決心する。このように、共同体の人々は純粋な善意や同情のみで救済を行うのではない。人々は様々な個人的理由から、救済へと乗り出すのである。

以上のような人々の救済に対する様々な思いは、共同体の人々の多様性を表している。そして、この多様性こそがセサの解放を手助けすると考える。奴隷としての人生で「白人」に対して嫌悪を持ったセサは、「先生」によって子供たちの自由を侵されそうになったことで、「白人＝奪うもの」という絶対的意識を完成させる。そして娘殺しを知られたことでポールDと別れ、その後ビラヴィドが自身の死んだ娘だと確信したセサは、124番地と外を完全に分離し、自身が生きられる世界は124番地の中だけだと考えるようになる。この様子から、彼女が偏った考えや価値観に固執してしまっていることが分かるだろう。彼女が自身の考えに固執するのは、共同体と隔絶してから18年間、他の人々と言葉や意見を交わすことが無かったからだ。つまり、様々な思考を保有する共同体との交流の再開は、セサの凝り固まった意識を緩和するのである。作品には解放の様子は描かれていないが、上記したようにセサの「母親であること」が自分の唯一の価値という認識は緩和されると推測する。

同時に、共同体による救済はセサにとって「辛い過去を癒す」性質を再び受け取れるようになるということだ。救済のため124番地に集まった女たちは、そこにかつての自分たちの姿を見る。そして彼女たちは祈りを捧げ始め、その後は叫び、歌へと続ける。この様子はまさしく、開拓地での癒しのようなものであると言える。歌を聞き124番地の戸を開けたセサは、“it was as though the Clearing had come to her” (308) と感じている。そして、女たちの声音が一つの音になったとき、彼女は開拓地の洗礼をうけたような衝撃を受ける。つまり、この救済は開拓地での癒しそのものであり、セサは共同体の「辛い過去も癒す」性質を再び享受することが可能になるのだ。

以上のように、共同体が行った救済について考察した。しかし、この時点ではまだ、セサは完全には救われない。ビラヴィドに置いて行かれたと考えるセサは「母親である」という自分の唯一の価値も失ってしまったと考え、外との関りも、生きる意志も、あらゆることを放棄してしまうからだ。つまり、過去の傷を癒せる状況にあっても、その癒しそのものを放棄してしまうのである。

そんな彼女に手を差し伸べ、意識を変えさせるのがポールDだ。ポールDはセサにとって特別な存在だと言える。開拓地に訪れ祈りを捧げたとき、彼女は次のことを確信した。“she wanted him in her life” (116)。そして、次のように続ける。“The mind of him that knew her own. Her story was bearable because it was his as well—to tell, to refine and tell again” (116)。この語り、精製し、また語るという繰り返しは、他者との記憶の共有であり、過去の辛い記憶を癒す行為である。彼女は今まで辛い記憶を他者に話すことがなかった。辛い記憶を思い出し、語るということは耐えられない痛みを伴うこと

だったからである。しかし、彼女はそれをポールDに共有したいと考えている。これはポールDが彼女の過去を少なからず知っているためでもあるが、お互いの知らない過去でさえも、彼女はいつか共有できるだろうと考えている。このことから、セサにとってポールDは初めて記憶や胸の内を共有し、支え合うことができると思った人物であり、彼女を過去から解放することができる人物であると言える。

ポールDがセサにとって特別であると同時に、セサもポールDにとって特別な存在である。セサの娘殺しの事件を知ったポールDは一度124番地から去ってしまう。しかし、完全に彼女のもとからいなくなるのではなく街に留まり、彼女が全てを放棄しようとしたとき、彼は再び124番地に訪れる。ポールDにとってセサは、彼が轡をはめられたとき、それに目を向けない優しさを持った人物だった。「先生」がスイートホーム農園の指揮を執るようになってから、彼の人として、男としての誇りは踏みにじられ、彼自身の中でも揺らいでしまう。そんな中で、彼女は動物のように轡をはめられた彼を見ないことで、彼の人としての尊厳を守るのだ。彼は彼女について次のように考える。“Only this woman Sethe could have left him his manhood like that. He wants to put his story next to her” (322)。この部分から、彼にとっても彼女は自身の人生を共有したいと思う人物であると分かる。つまり、ポールDとセサはお互いに辛い記憶の共有者であり、支え合うことで生きていくことができるのである。

ポールDがセサにもたらした最大の救いは、彼女に自己愛を教えるところにあると考える。セサのもとを訪れたポールDはセサに“*You your best thing, Sethe. You are*” (322) と伝える。これはセサに自分自身を愛することを説く言葉である。自身を白人に汚されたものとして嫌悪するセサは、その自己嫌悪によって自分の「母親であること」以外に自身の存在価値を認めることができなくなった。その唯一の存在価値も失ったと考え全てを放棄しようとしたセサにとって、彼女自身はもう何の価値もないのである。そんな彼女にポールDは「母親であるセサ」、つまり「母親であること」を所有するセサに価値があるのではなく、セサという一人の存在そのものが大切なものであると伝える。この言葉を受けたセサは“*Me? Me?*” (322) と衝撃を受けたように繰り返す。ポールDという特別な存在に教えられることで、彼女は初めて「母親」やそれ以外の何かの役割を果たす自分ではなく、自分自身そのものの価値を知る。つまり、自己愛を持つことになるのだ。セサはこのように、「母親であること」への執着、濃すぎる母性愛から解放され、自分の価値を認めていく可能性を見出すのである。

本章では、セサの濃すぎる母性愛からの解放に着目し、彼女がどのように解放に向かっていくのか考察した。娘デンヴァーの行動により124番地は共同体へと再び組み

込まれる。共同体の人々は124番地が共同体に復活することで初めてその状況を知り、救済へと乗り出す。この救済で、セサは自身の辛い過去を癒す場を取り戻し、女たちの唄の中、まるで開拓地の洗礼を受けたかのように感じる。そして、124番地が共同体の一員として復活した後、彼女の心を救い、生かすのはポールDである。彼は彼女に自己愛を教え、彼女の辛い過去の最初の共有者となるのだ。この作品ではその解放の可能性までしか描かれていないが、このようにして、彼女は自身の濃すぎる母性愛から解放され、自身の存在価値と「自己愛」を回復していく。

### 結論

本論文ではセサの濃すぎる母性愛に注目し、その内容と成り立ち、解放までを考察した。第1章では、セサの濃すぎる母性愛が具体的にどのように濃すぎるのか考え、彼女の母性愛には子供たちへの純粋な愛情だけでなく、「母親であること」という自己への執着が多分に含まれていると考察した。第2章ではその「母親であること」への逸脱した執着がどのようにして生まれたのかに着目した。彼女の奴隷としての人生を振り返り、彼女の執着が白人支配によってつくられた強い自己嫌悪と、スイートホーム農園時代の自己確立、喪失から生まれたものであると分かった。そして、第3章ではそのようにして生まれた濃すぎる母性愛から、彼女がどのように解放されていくのかを考察した。彼女は娘デングァーの働きかけにより、共同体に再び組み込まれ、過去の辛い記憶を癒す場を再び得る。そして、ポールDという記憶の共有者をえたことと、彼によって自己愛を教えられたことで、彼女は「母親であること」への執着から真に解放され、自分自身が存在することを認められるようになるのである。

最後に、モリソンがなぜ一人の女性奴隷の人生に焦点を当てた作品を描いたのかを考察する。それは、黒人奴隷がいた時代を単なる史実として完結させないためであり、小説としてセサの人生や思いを語り、読者と共有することで、黒人の奴隷時代という辛い記憶の癒しを試みているためだと考える。小説で一人の母親に焦点を当てて描くことで、奴隷の人生は単なる歴史上のエピソードではなく、ある一人の血の通った人生として描かれる。これによってモリソンは、奴隷の人生を知識としてではなく記憶として読者に伝えようとしている。そして、本論文で考察してきたように、黒人社会において辛い記憶からの回復はその記憶を語り合い、共有することで行われる。つまり、小説にて奴隷の人生が「語られ」、読者が読むことで「共有」されていくということは、奴隷たちの記憶を癒す作者の大きな試みと言える。このように、モリソンは

長瀬 歩優

*Beloved*という作品に、奴隷たちの辛い過去を癒すという願いを込めているのである。

#### 参考文献

Morison, Toni. *Beloved*. Vintage, 1987.

藤平育子『カーニバル色のパッチワークキルトー トニ・モリソンの文学』学藝書林、  
1996年。

## 1. はじめに

言葉には必ずそれ自体が持つ言内の意味がある。しかしながら我々がそれらの言葉を使用するとき、そこには言内の意味だけではなく言外の意味が往々にして含まれる。この言外の意味というものは非常に曖昧な概念であり、一概に定義するのが困難であるが、驚くべきことに我々は言葉を交わす中でこれを即座に理解し他者とのコミュニケーションを成立させることができる。

言葉に含まれる言外の意味は言内の意味から容易に想像できるものもあれば、言内の意味とは一見関わりがないようなものも存在する。後者のように言外の意味が言内の意味から乖離しているような表現の一例としてアイロニーと呼ばれるものがあり、以下の (1) の文はその一例である。

(1) 君は天才だね。

(1) の文だけを見れば、これは聞き手を称賛する肯定的な内容であると考えられる。だがこの文が以下の (2) のような場面において使用された場合にはどのような意味が含まれるだろうか。

(2) A: この間の数学のテストでクラス最下位になっちゃったよ。  
B: 君は天才だね。

(2) の場面では、数学の試験でクラス最下位という結果となった友人に対して (1) と同様の文が用いられている。この場合に (2b) の文は聞き手を称賛する意図では用いられておらず、むしろ聞き手を侮蔑するものであると推測できる。(2b) の文は表面上 (2a) の話者を天才だと褒めているが、実際にはテストで低い点数だったことを揶揄する当てこすりの表現となっているのだ。

このようにアイロニーの表現は日常の言語使用の場面において頻繁に用いられているが、何故我々は敢えてコミュニケーションの際にそのような回りくどい表現を用いるのだろうか。そしてそのような遠回しな言い方の裏に隠された真意を我々はどう

やって見つけ出しているのだろうか。本論文ではアイロニー表現のうち、(2a)のように真意と反対の言葉を用いることで相手を間接的に非難する皮肉の言語表現に焦点を当て、それらがどのような動機で使用され、どのようにして理解されるのかについて先行研究の比較と検討に基づいた仮説を立て、その妥当性を示す。

はじめに第2章では「アイロニー」と「皮肉」のそれぞれの言語表現について定義づけを行い、本稿で論じる皮肉表現がどのようなものであるかを説明する。両者がどのような概念であるかの定義づけを踏まえて、第3章では皮肉を含むアイロニーに関する先行研究を概観し、そこから得られた知見をもとに第4章及び第5章において皮肉の生成と認識のメカニズムについてそれぞれ仮説を立て、その妥当性について説明する。最後に第6章において本稿の結論を述べ、今後の課題についてまとめる。

## 2. アイロニーと皮肉はどのように区別されるか

本章では皮肉に関する議論の前提として、アイロニーと皮肉がそれぞれどのように定義されるかを議論し、本稿で論じる皮肉表現がどのようなものであるかを説明する。皮肉とアイロニーは類似した概念であるが、完全に一致するものではない。加えて本論文で概観する先行研究の多くは皮肉ではなくアイロニーに焦点を当てたものであるため、皮肉とアイロニーがどのような点において異なるのかを明確にした上でそれぞれの先行研究を分析する必要があると考えられる。そこで本章では辞書の説明に準拠して両者の相違点を分析し、本論文での皮肉表現の定義を明確にする。

まず、皮肉の意味を広辞苑で調べると以下のような説明がなされている。

- (3) ①皮と肉。転じて、からだ。
- ②うわべ。表面。理解の浅い所。
- ③骨身にこたえるような鋭い非難。
- ④遠まわしに意地わるく弱点などをつくこと。あてこすり。
- ⑤物事が予想や期待に相違した結果になること。

(注1)

(3) に示される意味を鑑みれば、相手を皮肉る表現とは婉曲的な表現によって間接的に相手を非難する表現であるということが言えそうだ。ではアイロニーはどのように説明されるのだろうか。英語の *irony* を OED で調べると以下のように説明されてい

る。

- (4) 1. A figure of speech in which the intended meaning is the opposite of that expressed by the words used: usually taking the form of sarcasm or ridicule in which laudatory expressions are used to imply condemnation or contempt.
2. A condition of affairs or events of a character opposite to what was, or might naturally be expected: a contradictory outcome of events as if in mockery of the promise and fitness of things.
3. In etymological sense: dissimulation pretense: esp. in reference to the dissimulation of ignorance practiced by Socrates as a mean of confuting an adversary. (注2)

(3) と (4) の説明を比較すると、皮肉が「非難」や「弱点などをつく」、「期待に相違した」のように皮肉の対象に対する攻撃性を含んだ語であるのに対し、アイロニーは「通常は皮肉や嘲笑の形式をとる」という内容の記述があるものの、字義通りの意味と反対の内容を意図する表現として説明がなされている。このことからアイロニーそのものは攻撃的な表現ではないものの、実際にアイロニーが用いられる際に相手を非難する意図を含む場合が多いものであると考えることができる。例えば以下に示す文は、アイロニーであっても皮肉とは考えられないだろう。

- (5) (褒められたことに対して) もう、そんなに褒めないでよ。

(5) の文の字義通りの意味を考えれば、話者は褒められることに対して否定的な態度を示していると解釈できる。しかし実際には褒められることを嫌がる人間は少ないため、多くの場合この言葉は字義とは反対の意味を含意していると考えられる。つまり「そんなに褒めないで」と言う人間は内心では褒められたことを喜んでいるのである。これは「使用された言葉の意味と意図された意味が反対である。」というアイロニーの定義には一致するが、「遠まわしに相手の弱点などをつく。」という皮肉の定義には一致しない。

以上のことから本論文では皮肉表現をアイロニー表現の一種ととらえ、アイロニーを「意図される意味と使用される言葉の意味が反対である言語表現」、皮肉を「アイロニー表現のうち、意図される意味が相手を非難するようなもの」と定義して議論を進めることにする。このことを踏まえ、次章ではアイロニーに関する先行研究を概観し、



その内容と問題点を明らかにしていくこととする。

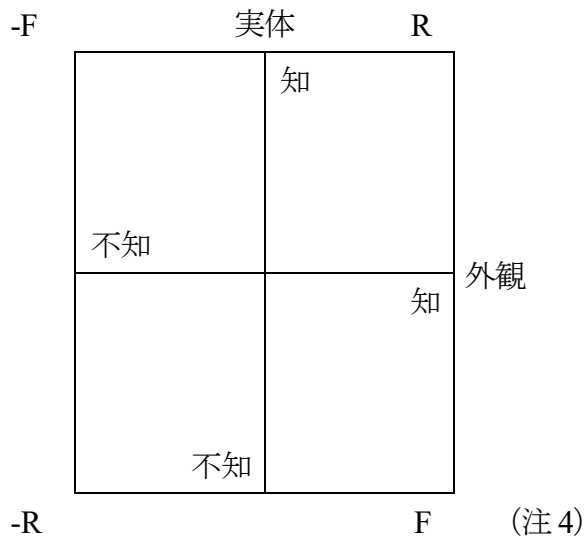
### 3. 先行研究

本章ではアイロニーを語用論の立場から分析した研究とアイロニーに特有な表現方法について分析した研究をそれぞれ概観し、前者の研究ではある発話が皮肉となるコンテキストやその発話が皮肉であると認識されるための条件について、後者の研究ではどのような表現の方法が発話を皮肉らしくするのかについて議論する。

#### 3.1. ある言語表現が皮肉となる時

本項ではアイロニーがどのような表現であるかを語用論の立場から分析した河上(1998)について検討し、その内容と問題点について議論していく。

河上はアイロニーを皮肉とほぼ同一のものであるととらえ、皮肉からいやみのニュアンスを取り除いたものをアイロニーと考えてアイロニーの分析を行った。河上は典型的なアイロニーの表現として、肯定的な内容の文を用いることで否定的な内容を含意する偽善型の表現と否定的な内容の文を用いることで肯定的な内容を含意する偽悪型の表現の2つに焦点を当て、それらの表現がコミュニケーションの場においてどのように扱われているかを論じた。河上は偽善型と偽悪型の表現について、使用される文そのものの意味を外観、使用される文が含意する意味を実体として両者を対立的にとらえ、「相手の実体を見抜いた上で気付かぬふりをし、相手の外観に合わせた表現をしたとき、それがアイロニーの表現となりうる」(注3)と説明した。河上はこの実体と外観との関係を下のような図で表している。



上の図において縦軸は実体を、横軸は外観を知っているかどうかを示している。4つの領域のうち R は実体も外観も知っている場合、-R は実体も外観も知らない場合、F は実体を知らないが外観を知っている場合、-F は実体を知っているが外観を知らない場合を示す。また、外観や実体について知っているかどうかは表面上そう見えるかどうかで判断され、「本当は実体についてそれが何なのか知っているけれど知らないふりをしている」という場合も実体を知らないと見なされる。河上はこの4つの領域の性質の違いをシャクトリムシと木の枝を用いて説明している。以下の文は河上の説明に基づいて、私が独自に作成したものである。

(6) (枝に擬態するシャクトリムシをシャクトリムシだと分かっているとき)

A: うわっ、シャクトリムシだ。

B: おお、なんて美しい枝だ。

(7) (枝に擬態するシャクトリムシを枝だと勘違いしているとき)

A: うわっ、シャクトリムシだ。

B: おお、なんて美しい枝だ。

(6a) は実体がシャクトリムシであると分かっているが外観をシャクトリムシであると判断する R の領域、(6b) は実体がシャクトリムシであると知りながら外観を木の枝と判断する F の領域、(7a) は実体がシャクトリムシであると知らないのに外観をシャクトリムシと判断する -F の領域、(7b) は実体がシャクトリムシであると分かっ  
ておらず外観を木の枝であると判断する -R の領域にあたる状況を示す。このうち皮肉と

なりうるのはFの領域にあたる状況であり、本当は実体を知っているのに知らないことを装って発話を行うことでそれがアイロニーとなりうると河上は論じている。この考えに基づき、河上は以下の(8)のような会話を例にアイロニーがいかなる動機で使用されるかを説明している。

(8) 昆虫採集で子供が捕虫網を不器用に振りまわし、蝶を逃がしたのを見て、

父「そんなやり方じゃだめだよ。こうするんだ、よく見てなさい。」

父親も失敗して蝶を逃がしたのを見て、

子供 A: a. 「なるほど、そうするわけ。」

b. 「なかなかうまいね。」

c. 「あ、採れた！」

d. 「さーすが。」

B: a. 「なーんだ、失敗したじゃない。」

b. 「下手だなあ。」

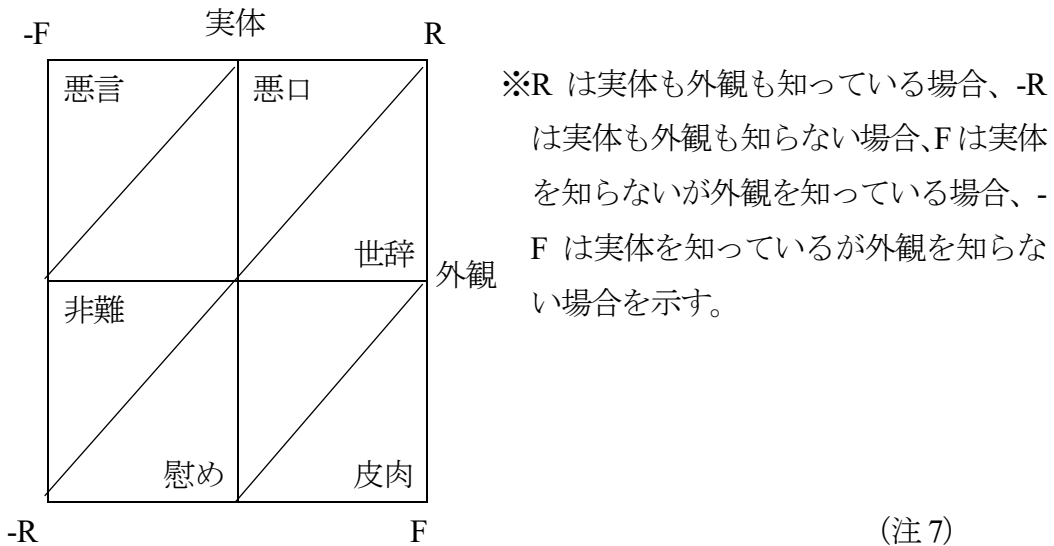
c. 「そら、逃げられた！」

d. 「なーんだ。」

(注5)

(8)の会話の最後には、蝶を逃がしてしまった父親に対して子供が発する可能性のある言葉が2つのグループに分けられて提示されている。前者はアイロニーの表現であり、後者は直接記述の表現である。前者のアイロニーの表現に共通する点ならびにそこから導出できるアイロニーの使用動機について、河上は「成功したときに用いられる表現なら何でもアイロニーの表現となりうる。勿論、実際は見事に失敗しているので、成功は単なる「期待」（つまり先行認識、外観）にすぎず、「下手だった」という「結果」（つまり現実認識、実体）と著しいコントラストを成す。(中略)「(外観認識とは逆の)実体認識を心に抱きつつ、外観認識を口にする」というのが正確なアイロニー表現の分析であろう。」(注6)と論じている。(8)の会話における父親の「こうするんだ、よく見てなさい。」という言葉を受けて、子どもは父親が蝶を捕まえることに成功すると思っていたのだと推測される。このような子どもの期待は実際に父親が失敗するのを目の当たりにするよりも前に持っていた認識であり、これが先行認識となる。成功するという先行認識が失敗したという現実認識と対比的に示されるとき、

現実認識を分かっているながら先行認識を言葉にする表現がアイロニーとなり得るのである。加えて河上は実体の認識と外観の認識の間にある隔たりの大きさについても着目し、他者についての否定的な評価を伝達する表現について好ましくない実体と好ましい外観のそれぞれの認識の関係に基づく表現の分類を以下の図によって示した。



上の図において点 R と点-R を結ぶ直線が実体の認識と外観の認識の一致する部分であり、この直線との距離が大きくなるほど実体の認識と外観の認識の間のズレが大きくなる。このとき点 F および点-F が直線との距離が最も大きくなる点であり、実体の認識と外観の認識のズレが最も大きい部分となる。本稿で注目したいのは、上の図における皮肉と世辞ならびに慰めの表現の関係性である。上述の (6b) および (7a) の文のように、外観や実体を知らないということは「知らないふりをしている」という場合も含んでいるため、R と-R を結ぶ直線より下の領域には好ましくない実体について知らないふりをしてつつ好ましい外観について述べるような表現が当てはまる。このとき皮肉は実体と外観のズレが大きい時に用いられる表現であり、このズレが小さくなると相手を非難する意図が弱い世辞や慰めの表現になると河上は説明している。

このように河上の研究では「好ましくない実体と好ましい外観のギャップ」という観点からアイロニーがアイロニーとなるための条件が論じられていた。しかし、河上のアイロニーの分析は話し手がどのようなときに皮肉を用いるかという点について詳細に論じられている一方で聞き手がどのようにアイロニーを認識するかというところの分析が不十分である。そのため、話し手が意図していないアイロニーを聞き手が認識した場合のアイロニーの仕組みを説明できない。皮肉表現をより正確に分析する

ためには、話し手の心情や状況評価だけではなく聞き手がアイロニーをどのように理解するかという発話理解の観点に焦点を当てた研究も見ていく必要があると考えられる。

### 3.2. 皮肉はどのようにして認識されるか

本項では河上（1998）とは異なる視点からアイロニーを分析した研究として内海（1997）の研究内容とその問題点について論じる。

内海は話し手がアイロニーを使用する意図や聞き手がどのようにアイロニーを認識・解釈するのかという問題を解決する理論として暗黙的提示理論と呼ばれるものを提案した。内海はアイロニー環境と暗黙的提示という2つの概念を用いて「アイロニーは現在の発話状況がアイロニー環境によって囲まれた状況であることを聞き手に暗黙的に提示する発話である。」（注8）ということをも主張した。アイロニー環境とはアイロニーの成立に必要な状況設定を指し、ある時点で話し手が持っていた期待がその後も満たされていない場合において話し手がそれに対する否定的な心的態度を持っている状態であると定義されている。また、暗黙的提示とはある言語表現が話し手の期待に婉曲的に言及すること、話し手の心情を暗示すること、適切な量や質のある情報を提供しないことなどの会話の原則に対する違反を含むことの3つの条件を満たすことによりアイロニー環境が婉曲的に提示されることであるとされる。そして上述のアイロニー環境がある発話状況において提示されていない、もしくは直接的に提示されている場合にはその発話がアイロニーになり得ないことも主張した。このことは以下の(9)の文によって説明されている。

- (9) 散らかっている部屋をきれいにしなさいと注意したが何もしない息子に対して母親が
- a. ものすごくきれいな部屋だわ。
  - b. きれいな部屋を期待していたのよ。
  - c. この部屋、本当に散らかってるわ。
  - d. 散らかったままで、もうがっかり。
- (注9)

(9a) ~ (9d) のそれぞれの文は母親が子どもに部屋を片付けるよう注意をした後に発話されたものであるから、このことから母親は「部屋がきれいにされている」という期待を持ってそれぞれの文を発話したものと推測される。このとき(9a)の文は「部

屋がきれいである」という文を発話することによって子どもに今の状態がきれいであることを伝達するのではなく、今の状態が母親の「部屋がきれいである」という期待に沿わないものであることを間接的に伝えていると考えることができる。このことから(9a)の文がアイロニーの表現となり得ると内海は述べている。一方で(9b)～(9d)の文は上述の期待に直接言及していることや部屋が散らかっているという事実を述べている点から非難の意図を持つ表現であってもアイロニーとはなり得ないのである。

また、内海はアイロニーの認識と解釈の条件にも言及している。聞き手がある言語表現をアイロニーと認識するのは、アイロニー環境に囲まれていることを直接的に表現していないが聞き手がその可能性を否定できない発話状況において、聞き手がその言語表現について暗黙的提示の3つの条件のうち少なくとも2つを認識できる条件下であるとした。加えて話し手の期待が既知である場合には、ある言語表現がその期待に婉曲的に言及するものであることを了解していることも一つの条件となるとしている。これらのことから内海はアイロニーの性質について「アイロニーはアイロニー環境の3つの条件が現在の発話状況で成立していることを聞き手に知らせるという発話内行為を遂行する。」(注10)と述べてまとめている。

このように内海の暗黙的提示理論は話し手がアイロニーを使用する意図だけでなく、聞き手がアイロニーを認識する過程についても説明を与えるものである。しかし、仮に聞き手が(9a)の発話を受け取ったときに聞き手が話し手の期待に気付かない場合や現実世界の状況に対して否定的な態度を示していると分からない場合ではなく、現実世界の状況を「部屋が汚い」と理解しておらず「部屋はきれいではないが汚れてもいない」のように考えている場合にはどうだろうか。この場合も同様に話し手の発したアイロニーが成立しなくなると考えられるが、これは発話状況がアイロニー環境を満たすかどうかに関わらず起こり得る現象ではないだろうか。このことから内海の研究で説明されている話し手の期待や語用論的な違反、否定的な心的態度などの要因に加えて、聞き手の現実世界の認識が話し手と異なっているかどうかという点も重要な要素であると考えられる。

また、前項から見てきた河上(1998)および内海(1997)はいずれも「どのような状況で言葉を使用するとその言葉が皮肉となるのか」や「どのような状況で聞き手が皮肉を皮肉と認識するのか」という観点からの分析が中心であり、「どのような言葉やイントネーションが皮肉表現に用いられやすいか」という観点からの分析が十分に行われていなかった。私たちが皮肉を皮肉と認識する手掛かりは、皮肉が発話される発話状況や文の意味を解析することによって得られるものだけではない。以下の2つの

文を比較してみよう。

- (10) A: 勉強していて偉いね。  
B: 真剣にお勉強なさっていてとても偉いですね。

(10) に示した文は、どちらも勉強していることを褒める内容のものであるが、(10b) の文に「とても」という程度の大きさを示す強調表現や「なさっていて」のような敬語表現が用いられている点で異なっている。これらの文を皮肉として用いた場合、(10b) の方が皮肉と認識される可能性が高いのではないだろうか。また、話し言葉においてはこれらの要素にアクセントを置くなどの話し方の工夫で皮肉であることがさらに分かりやすくなると推測される。このように文脈や文の意味とは関係のない要素も皮肉を分析するうえで重要となると感ぜられるのではないだろうか。この点を鑑みて、次項ではアイロニーの表現を敬語や修飾語といった皮肉らしさを高める要素としてのアイロニー標識に着目して分析した研究を見ていくことにする。

### 3.3. 皮肉になりやすい表現

本項では前項で見た2つの研究の問題点を踏まえ、アイロニーがアイロニーと認識されやすくなる状況や表現について実験をもとにまとめた研究である林田・高橋(2004)について見ていく。林田らはこれまで行われてきたアイロニーに関する様々な実験について概観し、それらの内容と結果をもとに、アイロニー研究において考慮すべき要素として発話の種類、状況の深刻さ、話し手と聞き手の関係、性別による受け取り方の違いの4つを挙げている。

実験内容に基づいた林田らの見解によれば、過度に丁寧な表現やネガティブな状況を控えめ、または大げさに評価した表現、修辭疑問が直接的な表現よりもアイロニーの意図が強いこと、アイロニーが発話される状況が深刻であるほどアイロニーの意図が強まること、話し手が聞き手よりの上の立場にいる場合にアイロニー表現のアイロニー性がより高くなること、性別によるアイロニーの知覚の差は異なる実験間で結果が矛盾しており十分に解明されていないことの4点がこれまでのアイロニー研究で示されており、今後の研究においては発話の内容や発話される状況の設定や発話の評価方法、話し手と聞き手の関係性、性別などのアイロニーの認識に関わる聞き手の個人レベルの特性について留意されなければならないということが述べられている。これらの要素は皮肉表現の皮肉らしさを高める重要な要素であると考えられる。

林田らの研究で紹介された実験では敬語表現や発話状況、話し手と聞き手の上下関係、性別など様々な要素がアイロニー表現に及ぼす影響について議論されているが、上述の要素以外にアイロニーらしさを高める要素として、(10b) で示したような強調表現やイントネーションの変化が挙げられるだろう。特に前者について、林田らの研究ではネガティブな状況を控えめに、もしくは大げさに表現するもののアイロニー性については説明されていたが、皮肉表現そのものを誇張した場合のアイロニー性については言及されていなかった。このように皮肉らしさを高める要素は多岐にわたることに留意する必要があるだろう。

また、これらの皮肉らしさを高める要素に関する研究成果を河上(1998)や内海(1997)のようなアイロニーの語用論的分析の結果と組み合わせることで、皮肉の生成と認識の仕組みに関するより包括的な枠組みを提案できるのではないかと思われる。次章および次々章ではこれまで見てきた皮肉やアイロニーに関する先行研究の内容とその問題点を踏まえ、皮肉の生成と解釈に対する仮説を提案するとともにその妥当性を示す。

#### 4. なぜ人は皮肉を用いるのか

本章では前章で概観した研究をもとに皮肉の生成のメカニズムについて考察を行う。

前章で述べたように、これまでの研究では皮肉の分析を行う際に会話のコンテクストに関わる要因とそうでない要因を総合的に勘案しているものが少なく、分析が一面的なものに終わっているものが多かった。上述の内容を踏まえて、本章では皮肉の生成について以下のような仮説を提案する。

- (11) 話し手の期待する状況と現実世界の状況との相違が大きくなるほど、話し手によって発話される言語表現が皮肉となりやすい。
- (12) 皮肉は話し手の期待する状況と現実世界の状況が乖離していることを非難の意図と共に聞き手に知らせるために用いられる。

上で提示した(11)および(12)の仮説について、先行研究との整合性を明らかにしながらその妥当性を示していく。最初に以下の(13)の文が皮肉となる場合について考える。



(13) (集合時間に遅刻した友人に向かって) 早く来てくれて嬉しいよ。

上の文の発話状況では、「集合時間に間に合うように来る」という話し手の期待する状況と「集合時間に遅れて来る」という現実世界の状況が少なからず乖離している。この両者の乖離が大きければ大きいほど(13)の文が皮肉になりやすいと考えられる。前章で見た河上(1998)の知見を踏まえれば、(13)の文が数分程度の遅刻に対して発話されたものならばそれが皮肉ではなく世辞や慰めとなる可能性もあるが、遅れた時間が大きくなればなるほど皮肉となる可能性が高まるということが言えそうだ。このことは以下の2つの発話状況における同一の文の解釈の相違からも示される。

(14) [ある家の庭は手入れがそこそこ行き届いている、ただし、レイアウトや樹木や草花の選び方にセンスがあるというまではいかないが、努力して整えられているという印象である。]

その家の隣人「きれいなお庭ですね。センスが素晴らしいんですね、きっと。」

(注11)

(15) [ある家の庭は特に手入れもされておらず、箒やスコップなども無造作においてあるような状態である。]

その家の隣人「きれいなお庭ですね。センスが素晴らしいんですね、

きっと。」(注12)

(14)と(15)の文を比較すると、(14)の発話状況では隣人の発話が相手を気遣うような世辞であると解釈されやすい一方で(15)の発話状況では隣人の発話が世辞であるとは考えにくい。これは「きれいなお庭」という話し手の期待する状況と実際の庭の状況の相違の大きさによるものであると考えられる。きれいなお庭という期待に対して現実世界の状況が(15)のような状況まで乖離してしまうと、同一の表現でも相手を気遣う発語内行為が成立せず、攻撃性のある皮肉になってしまうのである。

ここまで期待と現実の間に一定の相違があることが皮肉の生成に必要であることを確認してきたが、加えて誇張表現がその相違の大きさに与える影響についても見ていきたい。以下の文は(13)の文に強調表現を加えたものである。

(16) すごく早く来てくれてとても嬉しいよ。

(16) の文のように「すごく」や「とても」のような強調表現をつけた場合、そうでない場合に比べて皮肉の意図が強まるように感じられないだろうか。これは実際に聞き手が集合時間に到着した時間と話し手の示す「早く来てくれた」時間の差が強調表現によってより大きくなっているからだと考えられる。そのように考えると、(20) の文の強調表現にアクセントが置かれた場合の皮肉らしさの変化も同様に説明できるのではないだろうか。強調表現に置かれたアクセントは到着時間の早さの程度が大きいことを強調する意図があるため、(22) の文を通常のイントネーションで発話したときよりも現実世界の状況との乖離がさらに大きいものとして示されることになる。このように考えれば、アイロニー標識として誇張表現が使われることも合理的に説明できる。これらのことから皮肉の生成の条件について、実際の状況と話し手の発話が示す期待される状況との差が大きくなるほどある発話が皮肉になりやすくなると私は考察する。

また、我々がわざわざ皮肉を用いる理由として、このような期待と現実の乖離を攻撃性をもって伝えようとしているからではないかと考えられる。皮肉の持つ攻撃性について以下の文を例として考えてみたい。

(17) (仕事上で裏切られた親友 X に対して) X は素晴らしい友達だよ。

(注 13)

(17) の文は話し手の「素晴らしい友達」という期待される状況が言葉として表出している一方で実際には話し手がその友人に裏切られているという事実があるため、両者の間に大きな相違がある。仮にこの文章がもし皮肉ではなく嘘の賛辞を述べる表現であるとすれば、この発話の目的は「X が話し手の期待する通りの人物である」ということを聞き手に伝達することであり、「実際にはそんな素晴らしい友達なんかではない」という期待と乖離した現実をほのめかすことではないと考えられる。また、弱い皮肉としての世辞の意図で (17) の文が用いられる場合にも期待と現実との間に相違があることを暗示する意図はあれど、友人 X を攻撃する意図は発話の目的に含まれないのではないだろうか。このように考えると、話し手が皮肉を使用する動機として話し手の期待と実際の状況が大きく異なっていることを攻撃的に暗示することが重要な要件となっていると推測できる。このことも同様に河上 (1998) で得られた知見とも一致する。

ここまで、皮肉がどのような状況で生成されるのかについて仮説を立て、これが先行研究で得られた知見と合致することを示した。次章では聞き手がある発話をどのようにして皮肉と捉えるのかという点について仮説を立て、考察する。

## 5. なぜ人は皮肉を理解できるのか

本章では先行研究を比較・検討して得られた知見に基づき、皮肉の認識について以下のような仮説を提案する。

前章で論じたように皮肉表現は話し手の期待と現実の乖離を伝える表現であるため、この乖離を聞き手が理解するための条件を考えることが皮肉の認識のメカニズムを解明することにつながると考えられる。これに基づいて本章では以下のような仮説を提案する。

- (18) ある発話の遂行する発語内行為に向けられる聞き手の関心が強くなるほど、その発話は皮肉と認識されやすくなる。
- (19) ある発話の丁寧さや発話に含まれる程度表現の度合いが通常のコミュニケーションで求められるものよりも強ければ強いほど、その発話は皮肉と認識されやすくなる。
- (20) 現実世界の状況に対する聞き手の評価が否定的であるほど、話し手の発話は皮肉と認識されやすくなる。

上で示した (18)、(19) および (20) の仮説について、先行研究との整合性を明らかにしつつその妥当性を示す。初めに以下の (21) の文の解釈を考える。

- (21) (味のまずい料理を口にして) この料理はとてもおいしいね。

(21) の発話は字義と反対の内容を含意する皮肉となりうる表現であるが、字義のみに着目すればこの文は料理がおいしいことを相手に伝えるものとなる。このように話し手の皮肉が聞き手に認識されないのは、聞き手が言葉そのものの持つ意味のみを勘案する形式意味論的な解釈を行っている場合であると考えられる。したがって(21)

の文を皮肉として正しく解釈するためには、聞き手が発話の内容でなく発語内行為により強く関心に向けて言葉を解釈するという(21)の条件が須要であると私は考察する。これは内海(1997)で示されたアイロニーの暗黙的提示理論とも符合するものと考えられる。

また、皮肉の認識において皮肉らしさを高める要素も重要な手掛かりとなることはこれまで再三述べてきた。このような手掛かりの一つとして、誇張表現や過度に丁寧な表現が挙げられる。前者が皮肉らしさに与える影響は前章で説明を行い、過度に丁寧な表現が皮肉らしさを高めることも林田・高橋(2004)の研究から示されていたが、丁寧さの度合いが過度であると見なされる場合についてもう少し具体的に考察を行いたい。まず以下の文が皮肉と解釈されるかどうかについて考える。

(22) (上司の淹れたコーヒーが美味しくなかったときに)

その人の部下「このコーヒーは美味しいですね。」

(23) (部下の淹れたコーヒーが美味しくなかったときに)

その人の上司「このコーヒーは美味しいですね。」

上の2つの文を比較すると(22)の文の方が攻撃性が低く、皮肉の意図が弱い表現であるように感じられる。これは「目上の人には敬意を払わなければならない」という社会通念によって(22)の文の丁寧さの度合いが適切であると判断できるのに対して、(23)の文は目下の人に敬語を使っている点で丁寧さの度合いが高くなりすぎてしまっているということが考えられる。このように発話の丁寧さの度合いは話し手と聞き手の関係などの条件によって変化しており、それらの条件によって決定された適切な丁寧さの水準を上回るほど皮肉の意図が認識されやすくなると考えられる。

さらに、聞き手が皮肉を認識するためのもう1つの要件として聞き手の現実世界に対する認識が否定的なものであるかどうかと関係していると私は考察する。先述したように皮肉の認識においては聞き手が発話の字義通りの内容ではなく発語内行為により強く関心に向けていることが重要であると考えられるが、そもそも聞き手が発話の発語内行為に関心に向けてるのは発話の意図が文の字義通りの意味と異なる可能性を考慮するときであると考えられる。すなわち、皮肉表現を受けた聞き手が発話の発語内行為に関心に向けてるケースは、発話が行われる際の現実世界の状況がその発話の内容と一致していないと聞き手自身が考えているときに起こりやすいのではないかと考え

られる。このように考えれば、以下のような話し手の意図していなかった皮肉を聞き手が認識してしまう理由も説明できるのではないだろうか。

(24) A: (B の勤勉さを褒める意図で) 君って本当に真面目だよな

B: 私のことつまらない人だって言いたいのか？

(24a) の文は聞き手の真面目な性格を褒める意図で発話されたものであるが、聞き手にその意図が正しく伝わっておらず、結果として「真面目」という言葉が皮肉として解釈されてしまっている。これは B にとって「真面目である」ということが「面白みのない人」というネガティブな評価を含意しているという信念があったからではないだろうか。このように聞き手の現実世界に対する認識が否定的なものである場合には、話し手の意図に関わらず発話が皮肉であると認識されやすくなるのではないかと推測される。

以上が皮肉の認識に関する私なりの考察である。次章では本稿の結論を述べ、今後の研究の課題についてまとめる。

## 5. 終わりに

ここまで、アイロニーに関する研究とそこから得られる皮肉の生成と認識の仕組みについて論じてきた。皮肉表現は話し手の期待と実態の相違が相当に大きいことを聞き手に暗示することで相手を非難する表現であり、聞き手が発話状況においてそのような乖離があると認識している、もしくは発話によって自覚を促されることによって皮肉の意図が認識される。言い換えれば、聞き手の現実世界に対する認識と実際の状況にズレがある状態では話し手の皮肉の意図が聞き手に理解されなかったり、話し手の意図しない皮肉が成立する可能性があると考えられる。

本稿で提案した仮説は、これまでのアイロニー研究で個別に論じられていた語用論的分析とアイロニー標識の役割を一つの枠組みにまとめ、様々なアイロニー標識が皮肉表現において果たす役割を語用論研究の知見に合致する形で定義することができるものである。皮肉表現の仕組みに関するより包括的な枠組みをいささかなりとも示すことができたのではないかと思われる。

本稿では皮肉らしさを高める要素として誇張表現や敬語表現、話し手と聞き手の上下関係などに焦点を当ててきたが、皮肉に関する研究をさらに深める手立てとして助

詞の有無や韻律上の特徴も考慮する必要があると推測される。また、本稿では日本語文のみを例に考察したが、使用される言語が異なれば皮肉らしさを高める要素も日本語のそれと異なることが予想される。

加えて本論文では先行研究の成果に基づいて仮説を立て、それを論証する形で研究を行ったが、今後の研究では例文を用いて実験を行い、皮肉に特有な形式や韻律とそれらが皮肉の生成と認識にどのように関わるのかを実際の言語使用の場面から分析していくことも必要であると考えられる。使用する例文についても、研究のために作成されたものではなく文学作品や新聞記事などから引用するのがより適切ではないだろうか。

このように本稿で示した仮説には改良の余地も多く残されているため、今後の研究では日本語文以外の皮肉表現も調査し、言語や文化の違いが皮肉の仕組みに与える影響やより多様なアイロニー標識の役割について検討していく必要があるだろう。

#### 注

注1：『広辞苑 第七版』（岩波書店）より引用

注2：『Oxford English Dictionary VIII』より引用

注3：河上誓作「アイロニーの言語学」『待兼山論叢』第32号 文学篇 1998年 1-16 ページ 7 ページ 1-3 行目より引用

注4：河上誓作「アイロニーの言語学」『待兼山論叢』第32号 文学篇 1998年 1-16 ページ 図2 より引用

注5：河上誓作「アイロニーの言語学」『待兼山論叢』第32号 文学篇 1998年 1-16 ページ 例文 (5) より引用

注6：河上誓作「アイロニーの言語学」『待兼山論叢』第32号 文学篇 1998年 1-16 ページ 7 ページ 13 行目～8 ページ 8 行目より引用

注7：河上誓作「アイロニーの言語学」『待兼山論叢』第32号 文学篇 1998年 1-16 ページ 図8 より引用

注8：内海彰「アイロニーとは何か？—アイロニーの暗黙的提示理論」『認知科学』第4巻 4号 1997年 99-112 ページ 103 ページ 4-7 行目より引用

注9：内海彰「暗黙的提示に基づくアイロニーの解釈モデル」『情報処理学会研究報告自然言語処理 (NL)』1997年 49-54 ページ 例文 (1) より引用

注10：内海彰「アイロニーとは何か？—アイロニーの暗黙的提示理論」『認知科学』第4巻 4号 1997年 99-112 ページ 107 ページ 15-17 行目より引用

注 11：春木茂宏「アイロニーの記述的研究 (3) — 賛辞、世辞、からかいとの比較—」『文学・芸術・文化：近畿大学文芸学部論集』第 18 巻 1 号 2006 年 39-69 ページ 例文 (6) より引用

注 12：春木茂宏「アイロニーの記述的研究 (3) — 賛辞、世辞、からかいとの比較—」『文学・芸術・文化：近畿大学文芸学部論集』第 18 巻 1 号 2006 年 39-69 ページ 例文 (7) より引用

注 13：岡本雅史「アイロニー発話の解釈随意性が示唆する発話理解の認知的構造」『語用論研究』第 2 号 2000 年 108-123 ページ 例文 (1) より引用

### 参考文献

内海彰 (1997) 「暗黙的提示に基づくアイロニーの解釈モデル」『情報処理学会研究報告自然言語処理 (NL) 』, 49-54.

内海彰 (1997) 「アイロニーとは何か？—アイロニーの暗黙的提示理論」『認知科学』第 4 巻 4 号, 99-112.

岡本雅史 (2000) 「アイロニー発話の解釈随意性が示唆する発話理解の認知的構造」『語用論研究』第 2 号, 108-123.

河上誓作 (1998) 「アイロニーの言語学」『待兼山論叢』第 32 号 文学篇, 1-16.

林田三重・高橋知音 (2004) 「アイロニー研究の現状と展望」『信州大学教育学部紀要』No.111, 89-98.

春木茂宏 (2006) 「アイロニーの記述的研究 (3) — 賛辞、世辞、からかいとの比較—」『文学・芸術・文化：近畿大学文芸学部論集』第 18 巻 1 号, 39-69.

新村出 (編) (2008) 『広辞苑 第七版』岩波書店.

Simpson, John & Weiner, Edmund (1989) *The Oxford English Dictionary, Second Edition*. Clarendon Press.

## 1. 序論

本卒論では日本人語母語話者による、分離文と否定が関わる英語文の習得について検証する。分離文とは選言的 (disjunctive) 表現をする等位接続の一つで、文法上同等の語句や節、文を結びつけた文のことをいう (綿貫 2000, p.591)。例えば (1a) では、apples と oranges は動詞 ate の目的語として文法上同等の働きをする語であり、これらを等位接続詞の or が結びつけている。or は日本語では「A かまたは B」に相当する。等位接続としては他に「A と B」を意味し、連言的な (conjunctive) 表現をする and が挙げられる (2)。

- (1) a. Mary ate apples or oranges.  
b. メアリーはりんごかオレンジを食べた。
- (2) a. Mary ate apples and oranges.  
b. メアリーはりんごとオレンジを食べた。

(1) の場合メアリーが食べたのはりんごのみ、もしくはオレンジのみと解釈され、(2) ではりんごとオレンジの両方を食べたと解釈される。また (1) と同様の働きをするものとして either A or B が挙げられ、(1) は (3) のようにも表現できる。

- (3) Mary ate either apples or oranges.

さらに、(1a) (3) に否定辞 not を加えると (1a) は (4a)、(3) は (4b) (4c) のようになる。

- (4) a. Mary didn't eat apples or oranges.  
b. Mary didn't eat either apples or oranges.  
c. Mary ate neither apples nor oranges.



(4a) の or は否定語の後で「A でも B でもない」の意味を表し、or の代わりに nor としてもよい (綿貫 2000, p.593)。また neither A or B は either A or B の否定文と同じ意味を持つ。つまりこれらは全て「メアリーはりんごもオレンジも食べなかった」という意味になる。一方で (1a) に対応する日本語の (1b) を否定すると (5) のようになる。

(5) メアリーはりんごかオレンジを食べなかった。

この場合、メアリーが食べたのはりんご、オレンジのどちらか一方のみであるという意味になる。このように日本語と英語では分離文に否定が関わる際、意味解釈が異なることが指摘されている (Grüter et al. 2010)。本研究では日本人英語学習者が、目標言語では (4a) のような分離文の否定は「一方のみを否定するのではなく、両者を否定する」という特徴を習得できているのかを調べる。

## 2. 英語と日本語における分離文と否定の関係

ここでは分離文の否定表現の解釈が言語によって異なる背景について述べる。まず、否定を真偽表で表すと、(6) のようになる。命題 P について、これが正しい (真 (True、T)) 場合、P を否定すると真偽値は偽 (False, F) に変わる。同様に命題 P が間違っている (偽、F) である場合、その否定では真偽値は T に変わる。(細井 2020)

(6)

P	Not P
T	F
F	T

(Grüter et al. 2010, p.130)

次に論理和を真偽表で表すと (7) のようになる。論理和とは、命題 P、Q について少なくともどちらか一方が真であれば真になるものである。逆に言えば、P と Q の両方の真偽値が偽である場合、これらの論理和も偽となる。こ

ここではこの論理構造を論理和と呼び、論理和を用いる文を分離文と呼ぶ。

(7)

P	Q	P or Q
T	T	T
T	F	T
F	T	T
F	F	F

(Grüter et al. 2010, p.130)

分離文の否定表現をする際にはこれらを組み合わせて解釈することになるが、論理和の作用域を広く見るか、否定の作用域を広く見るかで異なる真偽表が出来上がる。まず、論理和の作用域を広く見る場合、P と Q のそれぞれを否定し、Not P と Not Q を論理和に組み込む形となる (8)。日本語は分離文の否定表現を解釈する際にはこの論理和の作用域を広く見る(否定の作用域を狭く見る)方法を用いる。

(8)

P	Q	Not P	Not Q	(Not P) or (Not Q)
T	T	F	F	F
T	F	F	T	T
F	T	T	F	T
F	F	T	T	T

(Grüter et al. 2010, p.131)

一方、否定の作用域を広く見る場合には P or Q を否定する形で解釈をする。つまり、P or Q の真偽を逆にすることで Not (P or Q) の真偽がわかるようになる (9)。この否定の作用域を広く見る(論理和の作用域を狭く見る)解釈は英語などで用いられる。

(9)

P	Q	P or Q	Not (P or Q)
T	T	T	F
T	F	T	F
F	T	T	F
F	F	F	T

(Grüter et al. 2010, p.131)

また、太田（1980）では論理的、会話的側面から英語における分離文をはじめとした否定表現を説明している。(1a) (3) のような[X [(either) A or B] Y]の形、つまり(either) or で結ばれた文は、[X A Y]と[X B Y]の文が(either) or で結ばれたものであり、(1a) は(10) のように言い換えることができる。

(10) (Either) Mary ate apples or Mary ate oranges.

これが否定表現になった場合には、de Morgan's Law（ド・モルガンの法則）が働く。de Morgan's Law とは論理学における法則の一つで、Not (P and Q) が真であるとき Not P or Not Q が成り立ち、また Not (P or Q) が真であるなら Not P and Not Q が成り立つというものである。

(11) Mary didn't eat apples and Mary didn't eat oranges.

[X [(either) A or B] Y]が否定されると not [X [(either) A or B] Y]となり、ここに de Morgan's Law を用いれば、not [X A Y] and not [X B Y]であるといえ、具体的には(10)が否定されると(11)のようになる。

このように、分離文と否定が関わりと解釈の仕方が一通りではなくなり、どちらを採用しているかは言語によって異なる。

### 3. 言語的背景

ここまで英語と日本語とでは分離文と否定が関わる際、意味解釈が異なる

ということについて言及してきた。本章では母語に加えて新しく言語を習得する際、どういった影響が考えられるか述べる。

### 3.1 UG

Hawkins (2019)によれば、Universal Grammar (UG、普遍文法)とは Chomsky (1998)によって提唱された言語獲得機能のことである。人間は、文法的な構造として何が可能であり何がありえないのかなどに関する知識を生得的に持っていて、これによって生まれたばかりの子どもたちはインプットを与えられれば急速に、正しく母語としてその言語を身につけることができる。つまり母語の習得はUGを介して行われるという提案である。一方、第二言語の習得に際してはこのUGを使うことができるか否かで議論を呼んでおり、すべてのUGの使用が可能とするのが Full Access to UG (Schwartz & Sprouse, 1996)、一部使用可能とするのが Partial Access (White, 1989)とされている (Slabakoba et al., 2020)。UGの使用できる範囲が広いほど母語を習得したときのように第二言語も習得することができる。

### 3.2 L1 Transfer

第二言語を習得する際には、母語を習得するときとは違い、すでに1つ以上の言語を身につけている。その中で検討されているのが、第二言語を習得する際に母語の影響が出るのかということである。これについてもUG同様、様々な仮説が存在し、完全に母語の影響が出るとする Full Transfer (Schwartz & Sprouse, 1996)、母語で習得したものが一部分のみ第二言語の習得に生かされるとする Partial Transfer (Vainikka & Young-Sholten, 1994)、母語で習得したものは一切第二言語の習得には影響しないとする No Transfer (Epstein, Flynn, & Martohardjono, 1996)の3つが存在する。Full Transferに関しては前述の Full Access と合わせて Full Transfer/ Full Access Hypothesis (Schwartz & Sprouse, 1996)とされており、L1を習得した状態がL2を学ぶ最初の段階であると位置付けられている。

### 3.3 Semantic Subset Principle

Crain et al. (1994)によれば Semantic Subset Principle (意味的部分集合の原理)とは、UGによる学習順序の制御のことで、目標言語の意味解釈の習

得を助けるものである。ある言語表現に関して論理的に 2 つ以上の解釈が可能であり、それらの解釈が上位集合と部分集合の関係であるときに働く。この場合、部分集合となるのは 2 つあるうちの意味の幅が狭い解釈方法である。例えばある文脈において部分集合とされる読みが真である場合、上位集合である意味解釈も真であるが、上位集合が真であってもその部分集合も必ず真であるとは言えない。これらの解釈方法を習得することを考えると、順序によってはその習得が困難であることがわかっている。

まず、部分集合とされる解釈方法を先に習得した場合、その状態の学習者に部分集合の解釈では真にはならない文脈である言語表現が用いられたとする。その際、学習者は自分の置かれた状況においてその言語表現が真になり得るという **Positive Evidence** を受けることで、新しく上位集合とされる意味解釈を身につける。一方で上位集合とされる解釈を先に習得した場合、部分集合にあたる意味解釈が必要とされる文脈に置かれたとしてもすでに上位集合である解釈方法でも与えられた言語表現が真であると解釈されてしまうため、もう一つの解釈方法があると学ぶことが難しくなってしまう。

そのため **UG** がまずは部分集合とされる解釈を想定し、そこから目標言語において上位集合とされる解釈が可能であるか検証した上で、不可能であればそのまま部分集合にあたる読みを定着させ、可能であれば上位集合とされる解釈を採用する流れをとっている。

**Semantic Subset Principle** とはこのように論理的に 2 つ以上の解釈が可能である表現について、目標言語で採用されている解釈を正しく習得することを保証するための学習原理と捉えられる。

#### 4. 先行研究

ここでは、分離文と否定について、日本語を母語とする子どもに対して L1 の習得の実験を行った Goro & Akiba (2004) と、日本人学習者における L2 英語の習得を研究した Grüter et al. (2010) を検討していく。

##### 4.1 Goro & Akiba (2004)

Goro & Akiba (2004) では 3 歳 7 ヶ月から 6 歳 3 ヶ月までの日本語を話す子ども 60 名、統制群として 29 歳から 32 歳の日本語のみを話す大人 10 名

に対し真偽値判断タスクを用いた実験を行った。日本語を母語とする子どもたちが日本語の分離文の否定をどう解釈するかを検証するための実験である。

実験は 12 種類の動物たちによる大食い大会という設定で進められた。<sup>1</sup> 子どもたちは実験者から大食い大会にはケーキ、にんじん、ピーマンがあることが告げられ、にんじんとピーマンに関しては嫌いな動物もいると伝えられた。

そのため i) ケーキだけでなくにんじんとピーマンを食べた動物には金のメダルを、ii) 野菜を一つだけ食べた動物には青いメダルを、iii) 野菜を何も食べなかった動物には黒いバツ印を与える、という 3 つのルールを伝えた。そして動物に与えられた褒美の情報をもとに、それに対して推測を述べるカエルのぬいぐるみの発言が正しいかどうかを判断してもらった。この推測の中に分離文の否定表現を用いた文が野菜をどちらも食べなかった連言的な文脈で 4 文、野菜をどちらか一つだけ食べた選言的文脈で 4 文、フィラーとして野菜を全て食べた文脈で 4 文の計 12 文が実験で用いられた。

実験の全体結果は、統制群である大人は動物が青いメダルを持っている選言的文脈（野菜を 1 種類のみ食べた文脈）で分離文の否定表現（動物はにんじんかピーマンを食べなかった）を 100%受け入れているのに対し、子どもは同じ文脈でも 25%しか分離文の否定を受け入れず、60 名のうち 4 名しか大人のような判断をしない、というものであった。分離文の否定表現は野菜を一切食べなかったバツ印を与えられた動物（連言的文脈）への推測にも用いられたが子どもたちはこの文脈では 78%が正しいと判断した。分離文の否定は選言的な意味を持つと解釈する大人とは異なり、子どもたちは連言的な意味を持つと解釈をした。つまり子どもたちは分離文の否定を 1 章で紹介した (4) を連言的に解釈する英語母語話者による英語の判断のように解釈しているといえる。

#### 4.2 Grüter et al. (2010)

Grüter et al. (2010) では分離文の否定表現を日本語を母語とする英語学習と英語を母語とする日本語学習者を対象に 2 つの実験を行なった。学習者たちが目標言語の分離文の解釈を正しく身につけているか、L1 の影響が出ているかを確かめることが研究課題であった。

実験の参加者はアメリカかカナダ在住の英語を母語とする 19 歳から 52 歳の日本語学習者 20 名、当時カナダに住んでいた日本語を母語とする 19 歳から 52 歳の英語学習者 32 名であった。両グループとも L2 以外に L2 に似た特徴をもつ言語に関する知識はない人で構成されている。それぞれに対し、統制群として 27 歳から 35 歳の日本語母語話者 10 名、18 歳から 37 歳の英語母語話者 15 名も参加している。

実験は、Goro & Akiba (2004) に倣って大人向けにデザインされた。動物たちの大食い大会の結果予想という設定で進められ、真偽値判断タスクを課した (Truth-Value Judgement Task)。大会にはケーキ、にんじん、ピーマンが出され、文脈として i) ケーキに加え、野菜をどちらか一つ食べた動物にはネックレス、ii) 野菜を両方食べた動物には王冠、iii) 野菜を食べず、ケーキのみを食べた動物にピエロの鼻が与えられるという 3 つの条件が用意されている。この情報と、王冠、ネックレス、ピエロの鼻をつけた動物のイラストをもとに 3 つにキャラクターがそれぞれどの動物が何を食べたか予想をし、その真偽を実験の参加者が判断するという形で行われた。キャラクターの推測文は実験参加者の学習言語で書かれている。推測文 45 文のうち、テスト文は「ピーマンかにんじんを食べなかった」または “didn't eat the carrot or the pepper” を含む、ネックレスをつけた動物 (にんじんかピーマン一方のみを否定する状況、選言的文脈) に対する分離文が 5 文、ピエロの鼻をつけた動物 (にんじんとピーマンの両方を否定する状況、連言的文脈) に対する分離文が 5 文の計 10 文である。

全体結果として、実験 1 (日本語) では、英語を母語とする日本語学習者が選言的文脈において分離文の否定を正しいとした割合は 84.0% (SD=32.83)、連言的な文脈で分離文を正しいとしたのは 31.0% (SD=37.54) だった。日本語母語話者は前者を正しいとした割合は 98.0% (SD=6.32)、後者を正しいとしたのは 4.0% (SD=8.43) だった。一方で実験 2 (英語) の結果としては、日本語を母語とする英語学習者は 82.5% (SD=31.62) が前者を正しいとし、27.5% (SD=35.47) が後者を正しいとした。英語母語話者で前者を正しいとした割合は 8.0% (SD=25.97)、後者を正しいとした人は 100% だった。

英語を母語とする日本語学習者は日本語の母語話者と似て選言的文脈における分離文を正しいと判断している。しかし、日本語を母語とする英語学

習者は日本語母語話者の日本語に対する判断と同じように連言的な文脈での分離文を受け入れず、100%が同じ文脈での分離文を正しいと判断した英語母語話者とは異なった反応を示している。つまり、英語を母語とする日本語学習者は日本語の分離文の性質を身につけていたと言えるが、英語学習者は母語である日本語の影響を受けており、英語での正しい解釈を身につけていないと言える。

Goro & Akiba (2004) によれば日本語を L1 とする子どもたちは分離文の否定は選言的な表現であるとは解釈せず、英語のように連言的な表現であると解釈する。一方で大人になると Grüter et al. (2010) で指摘されているように、英語を学習しても分離文の否定表現を英語母語話者のように解釈することが難しくなる。これは英語を母語とする日本語学習者が日本語の分離文と否定を正しく解釈できるという状況とは異なっている。この L1 日本語の英語学習者と L1 英語の日本語学習者における母語の影響の非対称性は Semantic Subset Principle (Crain et al., 1994) によって説明することができる。つまり、分離文の否定表現を連言的文脈で真とするのが部分集合にあたる読みであり、英語日本語に関わらず母語を習得する際にはこの意味解釈を採用する。その後、日本語を母語とする人々は上位集合とされる、分離文の否定表現を選言的文脈で真とするのが日本語であると学習し、上位集合にあたる読みをするようになる。その結果第二言語として英語を学ぶ際には母語で用いている上位集合にあたる解釈方法から部分集合にあたる意味解釈を学ばなければならないため、日本語母語話者は英語での分離文と否定を正しく解釈できなくなると考えられる。

## 5. 研究課題と仮説

### 5.1 研究課題

本研究では日本語を母語とする英語学習者が英語における分離文の否定表現 (The animal didn't eat the carrot or the pepper.) を正しく解釈ができるかを実証的に検証することを研究課題とする。

### 5.2 仮説と予測

本研究の仮説は「第二言語習得において学習者は L1 の影響を受ける」と



する。また Grüter et al. (2010) の結果を受け、本研究の予測は以下の通りとする。

- ① 否定の作用域を狭く解釈することで、片方を否定する文脈での英語の分離文否定表現を受け入れる。
- ② 両方否定する文脈ではこれを誤りとする。

### 5.3 本研究

本論文の実験は Grüter et al. (2010) の実験文を踏襲し、英語と日本語の 2 種類の実験文を用意し、Google Form で予備実験と本実験を行った。

### 5.4 実験文

実験文は真偽値判断タスクを組み込んだ、Grüter et al. (2010) を踏襲した。実験文は練習問題が 2 題と本問が 15 題あり、1 つの文脈に 3 文、合計で 45 文ある。文脈はフィラーを含めて 3 タイプあり、図 1、図 2 のようにイラストを提示する。実験の結果としては図 1、2 の 2 タイプのみ検証する。

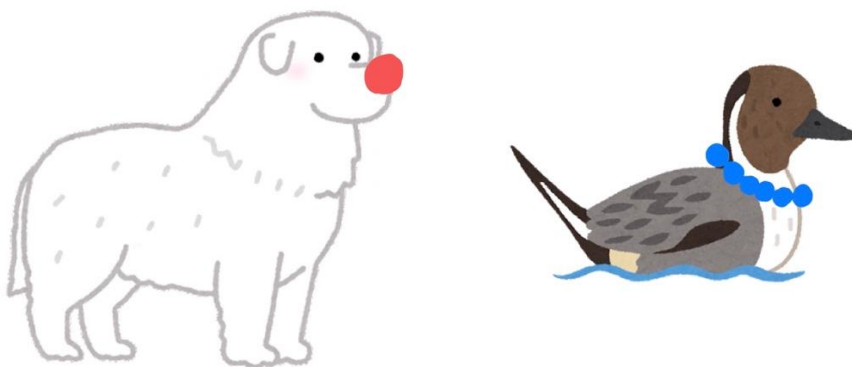


図 1. 文脈 A (赤鼻、連言的文脈)、図 2. 文脈 B (青ネックレス、選言的文脈)

図 1 および図 2 の文脈に (12) の “The animal” (もしくは「動物」) の部分

を各動物に書き換えた分離文と否定が関わる表現がそれぞれ 5 文ずつ与えられ、計 10 文で実験は構成されている。

(12) a. The animal ate the cake, but he didn't eat the carrot or the pepper.

b. 動物はケーキを食べたが、にんじんかピーマンを食べなかった。

英語の (12a) は否定の作用域が広く解釈されるため、「動物は 2 種類ある野菜のうち 1 種類も食べなかった」という意味となる。一方日本語の (12b) では否定の作用域が狭く解釈されるため、「動物は 2 種類ある野菜のうちどちらか 1 種類のみ食べた」という意味になる。つまり (12) のような分離文と否定を組み合わせた表現と上記 2 タイプの文脈の合致を判断する際、実験参加者は (13) (14) のように反応することが期待される。

(13) 文脈 A (動物が 2 種類ある野菜を両方食べない文脈、連言的文脈)

英語：正しい

日本語：誤り

(14) 文脈 B (動物が 2 種類ある野菜のうち一方のみ食べた文脈、選言的文脈)

英語：誤り

日本語：正しい

出題の順番としては、推測文の正誤を判断するために参加者に与える文脈 (動物に与えられたご褒美) が同じものが 3 回以上続くことがなく、順番に規則性が現れないようランダムに出題した。<sup>2</sup>

## 6. 予備実験

### 6.1 参加者

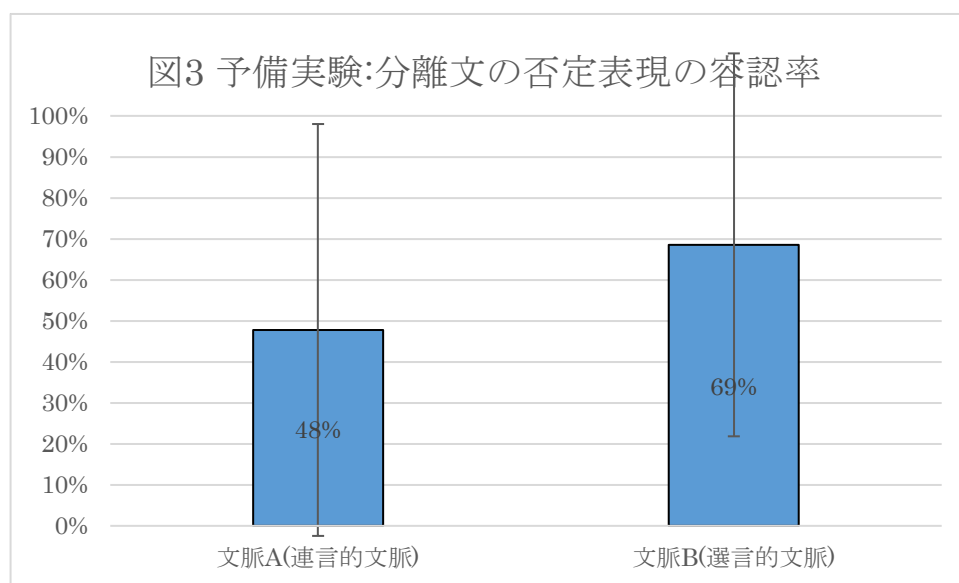
予備実験では、同じゼミナールに所属する日本語を母語とする 20 歳から 28 歳まで (Mean: 21.6) の英語学習者 20 名に対して英語の実験文を用いた実験を行い、45 文全体で正答率が 6 割を切った 2 名を除いた 18 名のデータ

を用いて実験結果とした。実験の設定を理解できていなかった可能性があるためである。<sup>3</sup>

参加者に対し、英語の学習歴や習熟度についてアンケートを行った。学習歴は学習開始年齢や、英語圏での2週間以上の滞在経験について、習熟度はTOEIC や実用英語技能検定などの外的指標による評価があればそれについても記入してもらった。学習の開始年齢は5歳から13歳 (Mean: 10.95) で、実験参加時の年齢からこの学習開始年齢を差し引いた学習期間は7年から16年 (Mean: 10.65) であった。18名中7名は2週間以上の英語圏での滞在経験があり (最大8ヶ月)、18名のうち15名が実用英語検定準2級以上、もしくはTOEIC 750点以上を取得していた。

## 6.2 予備実験結果

予備実験で学習者が文脈 A (連言的文脈) で否定の分離文を正しいと判断した割合は平均 48% (SD 50)、文脈 B (選言的文脈) で否定の分離文を正しいと判断した割合は平均 69% (SD 46.7) であった。



個人のレベルでは18人中8人が文脈 A において分離文の否定を5文中4文以上で正しいと判断し、8人が5文中4文以上を誤っていると判断した。一方、文脈 B で5文中4文以上の分離文の否定を正しいとしたのは12人、逆に5文中4文以上の分離文の否定を誤っているとしたのは5人だった。

予備実験を通じて短時間で動物に与えるご褒美のルールを理解し問題を解いてもらうことは難しいものだとわかったため、本実験ではご褒美のルールを説明したイラストを見ながら、もしくはメモをしながら実験に参加してもらう形に変更した。

## 7. 本実験

### 7.1 参加者

本実験では、日本語を母語とする 21 歳から 23 歳 (Mean: 22.1) の英語学習者 10 名に英語で、日本語母語話者 21 歳から 23 歳 (Mean: 22.2) 9 名には日本語で実験を行った。統制群として英語母語話者 4 名にも英語学習者と同じ英語の実験に参加してもらった。また、英語学習者に対しては英語の学習歴や習熟度についてアンケートを行った。学習の開始年齢は 3 歳から 12 歳 (Mean: 10) で、実験参加時の年齢からこの学習開始年齢を差し引いた学習期間は 9 年から 19 年 (Mean: 12.1) であった。10 名中 5 名は 2 週間以上の英語圏での滞在経験があり (最大 2 ヶ月)、10 名のうち英語系の資格を有さない 1 人を除いて全員が実用英語検定準 2 級以上、もしくは TOEIC 770 点以上を取得していた。統制群の英語母語話者 4 名は全員カナダ在住で日常的に使う言語は英語である。4 名のうち 1 名の回答結果は先行研究で示されたような結果と逆の反応を示していたため、実験のデータはこの 1 名を除き 3 名で算出している。

## 7.2 全体結果

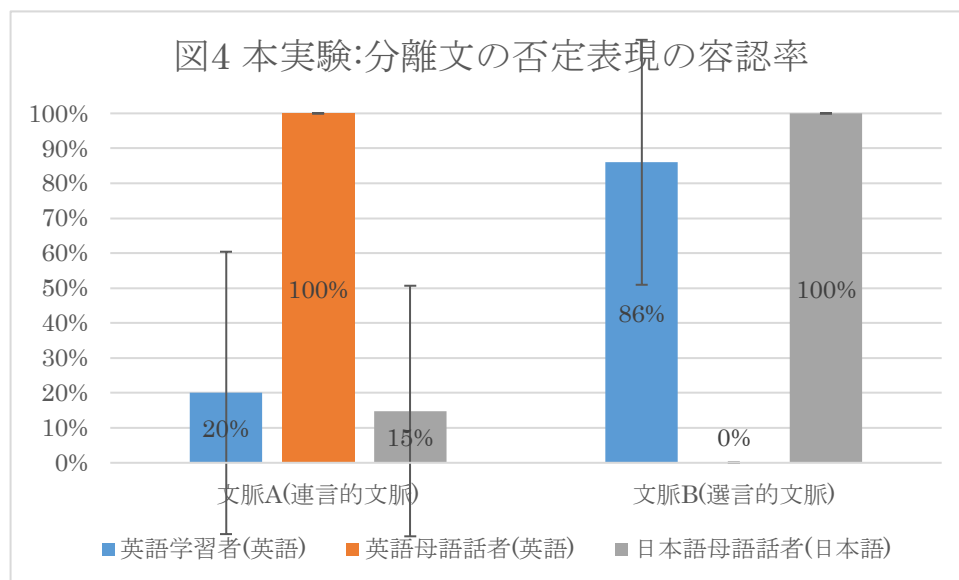


図4は文脈A、文脈Bで分離文と否定の関わる表現を受け入れた（正しいと判断した）人の割合を英語母語話者対象の英語の実験、英語学習者対象の英語の実験、日本語母語話者の日本語の実験の全体結果をそれぞれグラフにしたものである。本実験では、日本語を母語とする英語学習者は英語では文脈B（選言的文脈）における分離文の否定表現を受け入れる人が多く、平均で86%（SD 35）が容認した。一方、文脈A（連言的文脈）では平均で20%（SD 40）しか受け入れられなかった。これは日本語母語話者に対する日本語での実験の結果と大枠同じ結果であると言え、日本語では文脈Bでの分離文の否定表現は100%（SD 0）、文脈Aでは15%（SD 36）が受け入れられた。統制群である英語母語話者に対する英語の実験では期待通り文脈Bで0%（SD 0）、文脈Aで100%（SD 0）が分離文の否定表現を容認した。

### 7.3 個別結果

表 1 は本実験での個人結果をまとめたものである。

表 1. 5 文中 4 文以上一貫した反応を示した参加者の数 ( ( ) 内は実験言語)

	文脈A 連言的な文脈		文脈B 選言的な文脈	
	容認	拒絶	容認	拒絶
英語母語話者(英語)	3	0	0	3
英語学習者(英語)	1	8	8	1
日本語母語話者(日本語)	1	7	9	0

個人のレベルでは、英語学習者 10 人のうち、連言的文脈での英語の分離文の否定表現を 5 文中 4 文以上を正しいと判断したのは 1 人のみであり、実際この参加者は 5 文全てを受け入れた。8 人は 5 文中 4 文以上を誤りと判断した。選言的な文脈では、前述の 1 名と同じ参加者が 5 文中 5 文すべてを拒絶した以外は、5 文中 4 文以上分離文の否定を拒絶した者はいなかった。逆に 5 文中 4 文以上を容認したのは 10 名中 8 名であった。日本語母語話者に対する日本語での実験では、連言的な文脈において 9 名中 7 名が 6 文中 5 文以上の分離文を誤りと判断していた。選言的な文脈では 9 名全員が 5 文全ての分離文の否定表現を正しいと判断している。一方英語母語話者に対する英語の実験では連言的文脈では全員が分離文の否定表現を正しいと判断し、選言的文脈では全員が分離文の否定表現を拒否している。

### 7.4 考察

日本語を母語とする英語学習者は英語母語話者とは違い、連言的な文脈での分離文の否定を受け入れず、選言的な文脈ではこれを受け入れている。これは日本語母語話者による日本語の実験と同じ反応であった。つまり学習者は否定の作用域を狭く解釈する L1 日本語の影響を受け、英語における分離文と否定も日本語の場合と同じように選言的な意味を持つと考えていることがわかる。そのため英語において期待される否定の作用域を広く解釈した読みができず、連言的な文脈で分離文と否定の関わる英語表現を拒絶したと考えられる。これは本研究における予測の通りであると言える。本実験の参

加者はそのほとんどが実用英語検定準 2 級以上かもしくは TOEIC 770 点以上を有しているため英語のレベルとしては中級かそれ以上である。それにもかかわらず英語母語話者のような反応を示していないことから、英語と日本語における分離文と否定の関わる文の解釈の違いを理解することは容易ではないと考えられる。唯一、英語母語話者と同様に英語の分離文と否定を連言的な文脈で 5 文すべて受け入れ、選言的な文脈では 5 文すべてを拒絶した実験参加者 1 名には英語圏での 2 週間以上の滞在経験はなかった。また習熟度に関する外的指標についても 10 人の中でもっとも優れた成績を有しているわけでもなかった。これらのことから日本語と英語での分離文の否定の解釈の違いへの理解は単純に学習者の言語力によるものではなく、また英語圏に滞在した経験で得られたインプットによるものでもないと考えられることができる。

## 8. 結論と今後への課題

本卒論では日本語母語話者による英語での分離文と否定表現の習得について検証した。英語と日本語とでは否定の作用域が異なるため、分離文と否定が関わる際に意味解釈に違いが出る (Grüter et al. 2010)、言語習得に関する生得的機能を踏まえ、Goro & Akiba (2004) と Grüter et al. (2010) を検証した上で、日本語母語話者は英語における分離文の否定の正しい意味解釈ができているかどうか実験を行った。結果として、日本語を母語とする英語学習者は英語においても日本語の場合と同じ解釈をした実験参加者が多かった。このことから英語での解釈にも母語である日本語の影響が強く出ていると考えることができる。また、本実験では 4 人の英語母語話者にも統制群として実験に参加してもらったが、実験文において予測や先行研究と逆の回答をしたため実験結果から外した参加者が 1 名いる。英語母語話者の参加者には母語や普段の生活で用いる言語についてのアンケートを行ったが、これに加えて第二言語として学習したことのある言語を答えてもらうことでその 1 名の反応についてそれらの影響を考慮し、さらに検証を深めることができたのではないかと考える。また英語母語話者のデータは 4 人分と少なく、より多くのデータを集める必要もある。

本卒論では日本語母語話者にとって英語の分離文の否定表現の正しい解

釈は難しいことであると結論づける。今後は分離文と否定が関わる際の正しい解釈を習得するために有用なアプローチがどのようなものであるか検証が必要となる。有効な指導となる可能性の一つとして、今後は分離文と否定の関わる表現についての明示的な指導について検証していきたい。

#### 脚注

<sup>1</sup> 実験参加者が子どもであったため褒美のルールを理解してもらうために推測文の正誤判断に至るまでほかにもタスクが課されているが、ここでは割愛する。

<sup>2</sup> 日本語の実験文に関しては基本的に英語と同じだが、分離文の否定表現の文が英語よりも1文多くなっている。これは私の実験準備段階でのミスが原因である。

<sup>3</sup> なおこの実験の参加者は10月に行われた実験の前に6月に私の卒業論文に関する発表を聞いている。したがって、日本語と英語では分離文と否定の解釈がことなることを覚えていた可能性がある。

#### 参考文献

- Chomsky, N. (1986). *Knowledge of language*. Praeger.
- Crain, S., Ni, W. & Conway, L. (1994). Learning, parsing, and modularity. In Clifton, L. Frazier, L. & Rayner, K. (Eds.), *Perspectives on sentence processing*. (pp. 443-467). Erlbaum.
- Epstein, S.D., Flynn, S., & Martohardjono, G. (1996). Second language acquisition: Theoretical and Experimental Issues on Contemporary Research. *Behavioral and Brain Sciences*, 19(4), 677-714.
- Grüter, T., Lieberman, M. & Gualmini, A. (2010). Acquiring the Scope of Disjunction and Negation in L2: A Bidirectional Study of Learners of Japanese and English. In *Language Acquisition*. (pp.127-154). Psychology Press.
- Goro, T. & Akiba, S. (2004). Japanese disjunction and the acquisition of positive polarity. In Yukio Otsu (Ed.), *Proceedingd of the Fifth Tokyo Conference on Psycholinguistics*. (pp.137-162). Hituji Syobo.
- Hawkins, R. (2019). *How second languages are learned*. Cambridge UP.
- Schwartz, B.D., & Sprouse, R.A. (1996). L2 Cognitive States and the Full Transfer/ Full Access Model. *Second Language Research*, 12(1), 40-72.
- Slabakoba, R., Leal, T., Dudley, A., & Stack, M. (2020). *Generative second*



*language acquisition*. Cambridge UP.

Vainikka, A., & Young-Sholten, M. (1994). Direct Access to X'-Theory: Evidence from Korean and Turkish Adults Learning German. In Hoekstra, T., & Schwartz, B., (Eds), *Language Acquisition Studies in Generative Grammar* (pp.31-48). John Benjamins Publishing Company.

White, L. (1989). *Universal Grammar and second language acquisition*. (pp. 173-174). John Benjamins Publishing Company.

太田朗 (1980). 『否定の意味』大修館書店.

細井洋伸 (2020). 中央大学文学部「英語学(意味論・語用論)」配布資料

綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘・マークピーターセン (2000). 『徹底例解ロイヤル英文法改訂新版』旺文社.

## 経験を表す「たことがある」と「ている」

山本 実佳

### 1. はじめに

本論は、日本語の「経験」を表す表現についてその性質を明らかにすることを目的とする。経験を表す表現として「たことがある」と「ている」が挙げられる。

- (1) a. 太郎は二年前アメリカに行ったことがある。  
b. 太郎は二年前アメリカに行っている。

(1a) と (1b) はどちらも「太郎は二年前アメリカに行った」という経験を表している。この二つの文の間に大きな意味の違いはないと考えられる。

- (2) a. \*太郎は先週アメリカに行ったことがある。  
b. 太郎は先週アメリカに行っている。

(2a) と (2b) はそれぞれ (1a) と (1b) の「二年前」を「先週」に置き換えた文である。「ている」を用いた (2b) では「太郎が先週アメリカに行った」という経験を表すことができるのに対し、(2a) では不自然な文となる。よって、「たことがある」と「ている」には共起できる時間を表す副詞に違いがあるといえる。この違いが何によって生じるのかに特に着目し、「たことがある」と「ている」の違いについて考えていく。

以下、2章では、「たことがある」と「ている」の違いについて形態論、意味論、語用論の観点からみる。3章では Kim (1998) を参考に経験の表現が表す状況を、4章では Inoue (1979) を参考に経験の文がもつ二種類の意味について考察し、(2) のような「たことがある」と「ている」の違いの原因を分析する。5章では明らかになったことを含め本論をまとめる。

## 2. 「たことがある」と「ている」の違い

本章では、日本語で経験を表す表現として挙げられる、「たことがある」と「ている」を比較していく。この二つは述部に接続し、経験を表すことができる。

(3) ケンは全国大会で優勝したことがある。

(4) ケンは全国大会で優勝している。

(3) と (4) には意味に大きな違いはないように思われるが、1章で示したように、異なる点もある。両者の相違点を考え、その相違点が「たことがある」、「ている」と時間を表す副詞の共起への影響について考察する。

### 2.1 「たことがある」と「ている」が持つ特性

「たことがある」と「ている」それぞれの性質をみていく。はじめに「たことがある」をみると、「たことがある」は述語が名詞化されていることがわかる。メイナード (1997) によれば、名詞化表現は、現象を切り取ってそれに関する主体の態度を伝える手段であり、出来事をいったん概念化・客体化する作用がある。現象を切り取り、概念化・客体化する作用がある名詞化を含む「たことがある」では、話者がその出来事を完結した過去のことだとみなす必要がある。したがって、名詞化が「たことがある」を含む経験の文で述べる内容は発話時と隔たっている必要があることに影響していると考ええる。また、池田 (1981) は名詞述語文をつくる「のである」の表現について、出来事や状態が全体として捉えられ、その存在と他の出来事、状態との関連性になり、出来事が「スル」的であっても「アル」的な存在にしてしまうと指摘した。名詞化するという点で共通する「たことがある」も同様に、出来事や状態を過去に起きた存在として捉え、出来事や状態そのものよりむしろ発話時やその他の事柄との関連性に着目する働きを持つと考えられる。

(5) a. リサは富士山を登った。

b. リサは富士山を登ったことがある。

過去形「た」型の(5a)と比較すると、(5b)の「たことがある」は富士山を登るという動作そのものよりもリサにその経験があるということに着目していることが分かる。

次に「ている」を考える。庵(2001)は『「ている」の基本的な意味は①動作・出来事の継続(進行中)と②変化の結果の継続(結果残存)に大別できる』と述べている。そしてそのほかにも③経験・経歴や④完了、⑤反事実を表すことがあることを指摘した。「ている」が進行中と結果残存のどちらの意味で用いられているかは動詞の意味で決まることが多い(変化動詞は結果残存、非変化動詞は進行中を表す)が、経験・経歴の意味を持つ場合は動詞の意味で定めることは難しい。庵(2001)によれば、経験・経歴を表すのは、文で表されている出来事と発話時との間に連続性がないとわかるときに限られる。

- (6) a. 田中さんはこの三年間この店で働いている。(進行中)  
 b. 田中さんは去年までの三年間この店で働いている。(経験)

「働く」という非変化動詞が用いられ「進行中」を表す(6a)は発話時を含む「この三年間」によって発話時と連続性がある。一方「経験」を表す(6b)は「去年までの三年間」によって、発話時と連続していないことがわかる。

- (7) a. この橋は五年前から壊れている。(結果残存)  
 b. この橋は五年前に壊れている。(経歴)

「壊れる」という変化動詞が用いられ「結果残存」を表す(7a)は、「五年前から」によって発話時にもその状態が続いていて、出来事と発話時が連続していることを含意している。そして「経歴」を表す(7b)は「五年前に」が用いられ、発話時にも橋が壊れた状態が続いていることは含意せず、出来事と発話時に連続性はない。ただし、(7b)は発話時との関わりが全くないということではない。壊れた状態ではないものの、その影響は発話時にあることを表す。出来事と発話時に関わりが一切なく、単に出来事の発生を述べる場合には「ている」ではなく「た」が適している(7c)。

(7) c. この橋は五年前に壊れた。(過去)

ここで、時を表す副詞との共起関係を考察するため、より近い過去の副詞を用いる。

(8) a. この橋は先週から壊れている。(結果残存)

b. この橋は先週に壊れている。(経歴)

(8a) を (7a) と比較すると、意味において副詞以外に違いはなく、結果残存を表している。同様に (8b) を (7b) と比較すると、(8b) では近い過去の出来事であることから発話時との関わりは(7b)より強く感じられるが、「橋が壊れた」という出来事が先週起きたことを述べ、発話時の状態には言及されておらず、発話時と連続性がない点は変わらない。このことから、「ている」の経験や経歴を表す用法では過去を表す副詞が発話時に近い過去か遠い過去かに関わらず用いることができると考えられる。

また、Inoue (1979) は「ている」が表す出来事や状態がいつ起きたのかは曖昧である、つまり過去、現在、未来のいずれのことも表すことができることを指摘した。

(9) 田中さんは[a. 学生時代に/b. 毎日/c. 来月には]この店で働いている。

この文は a, b, c のような副詞や文脈があって初めて、「田中さんがこの店で働いている」という状態がいつのことなのか明らかになる。「ている」が経験を表すとき出来事や状態は過去のことであり、反対に出来事や状態が過去のときその文は経験を表す。ただし、(6a) の「この三年間」や (7a) の「五年前から」は過去を含む表現であるが、これは三年前もしくは五年前に出来事や状態が始まっただけで現在について述べる副詞である。よって (6a)、(7a) は過去の文ではなく、経験の文にもなり得ない。そして「ている」が過去のことを表すと受け手が認識するにはそれが過去を表すことが明らかにわかる文脈や、「ている」を含む文の中に発話時と連続性がないことを示す副詞を含む必要があると考えられる。

このように、「たことがある」は述語が名詞化されていることから、話者

が文で述べる出来事や状態を完結した過去のものとして捉えていることになる。よって、「たことがある」と共起できる副詞は発話時とはある程度隔たっているものに限られるといえるだろう。また「ている」は「進行中」、「結果残存」、「完了」、「反事実」など、「経験・経歴」の他にもたくさんの相を表すことができ、文に含まれる出来事や状態が過去、現在、未来のいずれのことでも表すことができる。したがって「ている」がどの時点のことをどの意味で用いられているのか明確にわかるように文脈や副詞で示される必要があることがわかった。

## 2.2 特殊性

ある出来事や状況を経験として述べる時、話者にとってそれが特殊なことである必要がある。はじめに「たことがある」を考える。

- (10) a. \*ケン は 朝ご飯 を 食べた ことがある。  
 b. ケン は 帝国ホテル で 朝ご飯 を 食べた ことがある。

上の文で、朝ご飯を食べるという、一般的に特殊な出来事ではないことを含む(10a)は不自然である一方、帝国ホテルで朝ご飯を食べるという、特殊性の高い出来事を含む(10b)は自然である。この経験の文での出来事の特異性の有無による受け入れやすさの違いは、当たり前なことは主語の経験を述べるのにふさわしくないという認識からくると考えられる(庵 2000)。ただしこの特殊性は話者にとってのものであり、帝国ホテルで朝ご飯を食べることが珍しいことではない人たちの会話の中では不自然になり得る。

次に「ている」を考える。

- (11) a. \*ケン は 朝ご飯 を 食べて いる。  
 b. ?ケン は 帝国ホテル で 朝ご飯 を 食べて いる。

経験を述べる文として受け入れられるかを考えると、この二文はどちらも不自然である。これは、「ている」が表す意味は「経験」だけではないことが原因と考えられる。2.1で既述したとおり、「ている」は①進行中②結果残存③習慣④経験⑤完了⑥反事実を表すことができる(庵 2001)。(11a)は、

ケンが現在朝ご飯を食べていること (①進行中) を表しているか、もしくはケンは朝ご飯を食べる習慣があること (③習慣) を表していると読み取るのが自然である。(11b) は (11a) よりも出来事の特異性が高く、多少は経験の文として受け入れやすく感じるが、進行中、または習慣と受け取る方が自然である。そこで、「ている」を含む文が進行中や習慣ではなく経験の文であることを明確にするためには、過去の出来事だと示す必要があると考える。

- (12) a. ケンは[\*以前/\*中学生のころ/\*二年前/昨日]朝ご飯を食べている。  
b. ケンは[以前/中学生のころ/二年前/昨日]帝国ホテルで朝ご飯を食べている。

(12a, b) はそれぞれ (11a, b) に過去を表す副詞を加えた文である。出来事の特異性が低い (12a) は「昨日」を含む場合を除いて、経験を表す文としては不自然である。一方、出来事の特異性が高い (12b) は、その出来事が過去のことであることが明確になったことで経験の文として自然なものになった。

以上の各文 (a, b) の比較から、経験を表す文では話者にとって文が表す出来事が特別であることが必要であることがわかった。しかし、(5b) と (6b) の比較から、特異性の高い、同様の出来事であっても「たことがある」と「ている」で容認度に違いがあることがわかった。つまり、「ている」の文ではたとえ出来事の特異性が高くても、過去を表す副詞が用いられないと「経験」の文だと判断されにくい。

### 2.3 くり返しの可能性

経験の文において、出来事や状況がくり返し起きる可能性の有無について、「たことがある」と「ている」には違いがみられる。はじめに「たことがある」について考える。

- (13) a. \*花子は右腕を失ったことがある。  
b. 花子は親指の爪を失ったことがある。

右腕を失うという、一度しか起こりえないことを含む文 (13a) は受け入

れられないが、爪ははがれても再び伸びるため繰り返す可能性がある文(13b)は受け入れられる。よって「たことがある」は、繰り返し起こる可能性があることについて述べることができるといえる。また、(13b)の意味について、花子には親指の爪を失った経験があり、いまはもう生えかわっていると解釈される。この解釈は 2.1 で述べた、「たことがある」の名詞化の作用が影響しているといえよう。

続いて「ている」をみる。

- (14) a. 花子は右腕を失っている。  
b. 花子は親指の爪を失っている。

こちらでは、繰り返す可能性のない(14a)、繰り返す可能性のある(14b)、どちらも受け入れられる。よって「ている」を用いた経験の文では、出来事の繰り返しの可能性はあってもなくてもよいといえる。(14)の意味について考えると、(14a)では経験の意味の他に、2.1 で述べた②結果残存の意味にとることもできる。ただし、「右腕を失う」という出来事は一度起きればその後もその状態が続くことになる。つまり「右腕を失う経験がある」ことはすなわち「以前右腕を失い、その状態が現在も残っている」ことを含意することとなる。よって繰り返す可能性のない出来事は、②結果残存と④経験を区別せず、むしろ必然的に両方の意味を持つことになるといえる。一方(14b)では、花子には親指の爪を失った経験や事実が過去にあるという解釈(経験)と、親指の爪は失われたままである発話時に着目する解釈(結果残存)が可能である。(14a)とは異なり、(14b)でのこの二つの解釈は明確に違う。2.1と同様、過去を表す副詞(節)を加えることで、結果残存と区別して経験の文であると示すことができる。

- (15) 花子は[以前/中学生のころ/二年前/昨日]親指の爪を失っている。

「以前」「中学生のころ」「二年前」「昨日」を加えることで、(15)が明確に経験の文だと解釈することができる。「昨日」は、爪が生えかわるには期間が短く、実際には爪は失われたままだと考えられるが、この文が述べているのは「昨日親指の爪を失った事実がある」ことであり、発話時にその状態



が続いていることではない。よって (15) はどの副詞を使った場合も経験の文である。

以上より、「たことがある」は繰り返す可能性のある出来事にのみ用いることができ、「ている」は出来事に繰り返す可能性があるかどうかに関わらず用いることができることがわかった。また、「たことがある」が表す文はその出来事の結果が現在は続いていないと解釈され、「ている」は経験と結果残存の意味を持つ可能性がある。出来事が繰り返す可能性がある文に「ている」が用いられる場合、過去を表す副詞節を用いることで経験の意味を表すことが明確になる。

## 2.4 語用論

「たことがある」と「ている」が語用論的に持つ意味について考える。Inoue (1979) では「たことがある」は思い出させる (recollective) 意味を持つと述べられている。

(16) 私は大統領に手紙を書い{たことがある/た}。

「た」では単に過去に手紙を書いたという事実を述べるにすぎないが、「たことがある」を用いると話者がその出来事を思い出して楽しんでいる気持ちが含まれる場合があるという。これに伴い、「たことがある」は話者の個人的、主観的なトーンを表す場合があるとした。

Kim (1998) は経験には文がいつの出来事や状態を述べているのか明確に示す「特定 (definite) の状況」と、いつのことかを示さない、もしくは特定できない表現で示す「不特定 (indefinite) の状況」があることを指摘した (詳しくは 3 章で扱う)。Kim (1998) では会話の中で話者が新たな話題を始めるとき、特定ではなく不特定の状況を表す経験の文が用いられると述べている。これは、会話の中で話者が持ち出す話題は正確に記憶しているというよりは思い出しながら楽しむような場合が多く、不特定の形の方が適しているということ、また話者が明確に記憶していたとしても新しい話題に関して聞き手がそのことについて特定できないだろうと話者が推測することによる、と説明している。

これに関連して、藤森 (2000) では新聞のコラムなどの文章でも同様の機

能があると述べている。

- (17) 私は、高校をアメリカと京都で二度卒業している。最近、その京都の高校の同窓会にでて驚いたことがある。…

(17)に続く文章のトピックは二文目と考えるのが自然だが、一文目を「二度卒業したことがある」に変えるとトピックが「二度卒業したこと」に感じられることから、「たことがある」はトピック提示の機能を持っていると説明している。

続いて「ている」の語用論的意味を考える。Inoue (1979) では「ている」は語用論的に報告 (reportative) の意味を含む場合がある、つまり客観的で証拠に基づいた過去のことについて表現する場合があると述べている。このことは副詞との共起にも影響がある。

- (18) 田中さんは先月、一週間ほど{\*入院したことがある/入院している}。

この文では「たことがある」では共起が難しい「先月」が「ている」では共起できている。これは語用論的に「ている」がもつ客観的な、証拠に基づくという意味が時間を表す副詞との共起を可能にしていると考えられる。

このように、「たことがある」は話者の主観的な、「ている」は客観的な語用論的意味を持つ場合がある。またこれにより、「たことがある」とは共起不可能な近い過去を表す副詞と「ている」との共起を可能にしている可能性がある。

### 3. 「経験」が表す二つの状況

#### 3.1 特定の経験と不定の経験

本章では、経験の意味を持つ表現が表す二種類の状況について考える。Kim (1998) は、日本語の「たことがある」、中国語の *guo*、韓国語の *ess-ess* と *un il i iss* を用いて、これらを含む経験を表す文の状況には特定 (definite) と不特定 (indefinite) の二種類があることを説明した。従来、経験を表す表現は不特定の状況しか表すことができないと考えられてきた。英語の現在完

了形も以下に示すように不特定の状況を表す。

- (19) John has eaten caviar before.  
(20) \*John has eaten caviar last Wednesday.

英語の現在完了形は(19)の before のような不特定なときを表す副詞とは共起するが、(20)の last Wednesday のような特定の一時を示す副詞とは共起できない。このことから英語の現在完了形が経験の意味を持つとき、それは不特定の状況を表す。英語で特定の状況を表すときは(21)のように過去形を使う。

- (21) John ate caviar last Wednesday.

日本語の「たことがある」も英語と同様、不特定の状況を表し、特定の状況を示すときは過去形を使う。

- (22) ジョンは以前にキャビアを食べたことがある。  
(23) \*ジョンは先週の水曜日にキャビアを食べたことがある。  
(24) ジョンは先週の水曜日にキャビアを食べた。

一方で Kim (1998) によれば、中国語や韓国語では経験を特定の状況として表す場合がある。中国語の経験を表す *guo* は、(25) のように不特定と特定の両方を表すことができる。

- (25) John      qunian    qu-guo      riben.

ジョンは 去年      行く[経験]      日本に

「ジョンの日本への訪問は去年のうちのいつか(不特定の時に)行われた」

「ジョンの日本への訪問は(一昨年でも今年でもなく)去年行われた」

この文は二通りの解釈が可能である。つまり「ジョンの日本への訪問は去年のうちのいつか(不特定の時に)行われた」という不特定の状況と、「ジョンの日本への訪問は(一昨年でも今年でもなく)去年行われた」という特



(28) ジョンは以前に日本に行っている。

(29) ジョンは先週の水曜日に日本に行っている。

(28) では、「ている」が不特定の時を表す副詞「以前に」と共起し、文全体としても不定の状況の経験を表している。また (29) では特定の時を表す副詞「先週の水曜日に」と共起し、文全体としても特定の状況の経験を表している。不特定と特定の両方の状況を表すことができるという点で、日本語の「ている」は中国語の *guo* と似ている。Kim (1998) では、経験が表す状況が不特定か特定かの区別は英語の完了形と過去形との区別と類似点があることを、英語の過去形が置かれる以下の三つの状態 (Leech, 1987) と照らし合わせて指摘した。

(30) the point of orientation を指定する三つの状態

a. (特定の)時を表す副詞が使用されている

I saw him on Tuesday.

b. 過去形または完了形が先行している

I have seen him already—he came to borrow a hammer.

c. 暗黙の定義—文脈から特定の時が推測される

Did you put the cat out? (Said between husband and wife who have in mind a particular time when the cat is normally ejected.)

英語では、ある文がこの状態にあるとき過去形が用いられ、完了形にはなり得ない。同様に、経験を表す文がこの状態にあるとき特定の状況を表し、不特定の状況を表すことはないことが Kim (1998) で示された。

(30) の状態について、「ている」が経験の意味を持つとき、特定の状況を表すか分析したい。前述のように、「ている」は中国語の *guo* に似ていることが上記で分かったため、(30) においても *guo* と同様の振る舞い方をすると推測する。(30a) については、2 章で過去を表す副詞との共起を扱い、また (29) から「ている」は特定の過去を表す副詞と共起することができることがわかっている。よって「ている」が (30a) の状態にあるとき、*guo* と同様に特定の経験を表すことができる。

続いて (30b) を考える。過去形や完了形が先行しているとき、それに続

く経験の文は特定の状況を表すとされている。まず (31) で「たことがある」の場合をみる。

- (31) a. わたしは去年ジョンに会ったことがある—ジョンは本を借りた。  
 [不特定の経験—過去形]  
 b. \*わたしは去年ジョンに会った—ジョンは本を借りたことがある。  
 [過去形—不特定の経験]

過去形の文が経験の文に続く (31a) は受け入れられるが、不特定の経験の文が過去形の文に続く (31b) は受け入れられない。続いて「ている」の振る舞い方をみる。

- (32) a. わたしは去年ジョンに会っている—ジョンは本を借りた。  
 [不特定の経験—過去形]  
 b. ?わたしは去年ジョンに会った—ジョンは本を借りている。  
 [過去形—不特定の経験]

2.2 と 2.3 で既述のとおり、「ている」は過去を表す副詞がないと経験の文であることさえ明確ではなく、まして特定の過去を指した経験を表すことはない (guo も時を表す副詞がなければ不特定の状況の経験を表す)。例によって不特定の経験が過去形に続く (32b) は不自然である。(32b) の二文目を特定の経験の文にした (33) は受け入れられる。

- (33) わたしは去年ジョンに会った—ジョンはそのとき本を借りている。  
 [過去形—特定の経験]

よって「ている」においても他の経験表現同様、過去や経験の文が先行する (30b) のとき、それに続く文は特定の経験の文である。

(30c) の状態における「ている」が表す状況を考える。文脈から特定のことを指すと推測される場合には、経験の文では特定の状況の経験を表すとされている。中国語の guo や韓国語の特定の状況の経験を表す ess-ess は特定の状況の経験を表すことができるため、そのような文脈でも受け入れられ

る。よって「ている」も特定の状況の経験を表し、(30c) のような文脈でも受け入れられると予測する。

(34) 一友人と一か月振りに会った際、その期間中にアヤがプールに飛び込んだ出来事を伝えている—

- i) アヤが川に飛び込んだ。
- ii) \*アヤが川に飛び込んだことがある。
- iii) アヤが川に飛び込んでいる。

不特定の状況しか表すことのできない「たことがある」は(34)の文脈では不自然だが、特定の経験を表すことができる「ている」は *guo* や *ess-ess* と同様に特定の経験を表すものとして受け入れられる。よって(30c)の状況で「ている」は特定の経験を表す。

このように、「ている」は特定の経験を表す条件下でそれを表すことができる。とくに中国語の *guo* と同様に不定の経験と特定の経験の両方を表すことわかった。また、*guo* はテンスがなく、副詞や文脈によってそれが定まる (Kim, 1998) ことも「ている」と共通しており、他にも同様の特徴がある可能性がある。

#### 4. 経験 (experiential) と存在 (existential)

「たことがある」が表す意味には経験 (experiential) と存在 (existential) の二種類ある (Inoue, 1979)。「たことがある」の文で動詞句が動作主や経験者を特徴づけるものであると解釈されるとき、経験 (experiential) の意味を持ち、そうでないとき存在 (existential) の意味を持つ。経験 (experiential) は「～は…した経験がある」、存在 (existential) は「～が…したというケースがある」と訳すことができる。

これについて Inoue (1979) は、助詞の「は」と「が」の機能が関連していることを説明した。「は」は、それが含まれる文のトピックを示したり、主語の特性を説明したり、他のものと比較したりする働きがある。一方で「が」は、主語をマークしたり、状況を説明したりする働きがある。

(35) ジョンは故郷に帰った。

(36) ジョンが故郷に帰った。

この二つの文で、(35) はジョンについての文である、もしくは故郷に帰ったのは他の誰でもなくジョンである、とジョンに着目する。これに対し(36) は、特別ジョンに着目することなく事実を説明している。このような助詞の機能の違いが「たことがある」にも影響があるという。

(37) a. ジョンは家を買ったことがある。

b. ジョンが家を買ったことがある。

(37a) は「は」によってジョンに着目し、ジョンにたばこを吸った経験があることを特徴づけているため経験 (experiential) である。一方 (37b) では「が」が用いられ、状況の説明という意味を持つ場合がある。例えば (37) が、「住居について話している中で、賃貸ではなく家を購入した人はいるか、という文脈の中で発話されるとき、これはジョンを特徴づける経験というよりはそうしたケースがあったという意味を持ち、存在 (existential) である。このとき「は」を含む (37a) より「が」を含む (37b) の方が適切である。このように、「は」と「が」の機能が「たことがある」の文の意味に影響があることがわかったが、「は」と「が」によって経験 (experiential) か存在 (existential) かを判断できるということではなく、あくまで影響があるに過ぎない。

続いて「たことがある」と共起する時間を表す副詞について考える。Kim (1998) は不特定の状況を表す文 (日本語の「たことがある」はこれに分類されている) では不特定の過去を表す副詞のみ共起可能であると述べた。Inoue (1979) では、特定の過去を表す副詞と不特定の過去を表す副詞が経験 (experiential) と存在 (existential) の文にどう関係しているのか論じた。Inoue (1979) によれば経験 (experiential) の文では Kim (1998) と同様、不特定の副詞が共起できる。



- (38) ジョンは{去年/<sup>?</sup>先月/\*先週}日本を訪れたことがある。  
(39) ジョンはマイと{去年/先月/<sup>?</sup>先週/\*先週の水曜日}食事をしたことがある。

例文内の時間を表す副詞は右のものほど時が特定され、特定するものほど共起しにくい。また、(38) より (39) の方が特定するものと共起できるのは、「日本を訪れる」と「マイと食事をする」には要する時間に差があることが影響しているという。つまり、「日本を訪れる」には数日から数週間要するが、「マイと食事をする」は数時間しかかからないため、後者はより短い期間でも終わられるものと考えられるとのことである。しかしこの説明だけでは数時間で終わるはずの食事を述べた (39) で「先週」や「先週の水曜日」が共起できないことの説明がつかない。これには 2.4 で述べた語用論的に「たことがある」が持つ意味である思い出したり懐かしんだりすることが関わっている。出来事を思い出して楽しむのは、発話時に近い時点のことよりある程度経った出来事について起こりやすいため、特定の過去を表す副詞とは共起しにくい。

これに対し存在 (existential) の文では、主語が不定であるときは不特定の過去の副詞とも特定の過去の副詞とも共起でき、主語が特定のものであるときは不特定の副詞のみ共起可能であるという。しかしこの点について Inoue (1979) では理由が述べられていない。存在 (existential) の文は主語を特徴付けるものではないため、主語が特定のものであるかは時間を表す副詞との共起に影響はないと考える。よって以下に示す (40) と (41) について、受け入れられるか否かに差はない。

- (40) 電話の悪用といえば、{先月/先月三日}夜中の三時に知らない人がかけてきたことがある。  
(41) 電話の悪用といえば、{先月/先月三日}夜中の三時に青木ケンがかけてきたことがある。

(40) の主語は「知らない人」で (41) の主語は「青木ケン」だが、それぞれの文のトピックではない。これらの文のトピックは「電話の悪用といえば」である。(40) と (41) は「電話の悪用について、～というケースが

ある」という内容で、「見知らぬ人」や「青木ケン」はそれがどんなケースかをいう「～」の一部に過ぎない。つまり(40)と(41)で主語が特定のものかは大きな問題ではない。また存在(existential)の文は事実を説明する意味をもち、経験(experiential)の文のような出来事を思い出す使われ方はしないため、副詞が不特定である必要もないと考える。つまり(41)は「先月」も「先月三日」も共起可能である。したがって存在(existential)の文はどの主語でも、またどの副詞でも共起可能である。

このように、「たことがある」には経験(experiential)という主語を特徴付ける経験の意味をもつときと存在(existential)という事象の存在を述べる意味をもつときがあるとわかった。またそれぞれの文で共起できる副詞もこの影響を受ける。

## 5. おわりに

本論では日本語において経験を表す「たことがある」と「ている」について、時間を表す副詞との共起に着目し、その性質を明らかにすることを目的としてきた。ここで(1)と(2)に話を戻したい。「二年前」を用いた(1)は「たことがある」のaも「ている」のbも受け入れられるが、「先週」を用いた(2)は「たことがある」のaは受け入れられず「ている」のbは受け入れられるという違いがみられる。この違いの原因は何か整理する。

- (1) a. 太郎は二年前アメリカに行ったことがある。
- b. 太郎は二年前アメリカに行っている。
- (2) a. \*太郎は先週アメリカに行ったことがある。
- b. 太郎は先週アメリカに行っている。

2.1では「たことがある」の述語の名詞化が近い過去を述べることを妨げていることがわかった。(2a)では話し手が「太郎はアメリカに行った」という事象を過去のものとしてみなして切り取るには発話時と事象が近過ぎることが(2a)が非文になることに影響している。2.2では経験の文の動詞句には話者にとって特殊なことが述べられること、2.3では繰り返す可能性がない動詞句は「たことがある」とは共起できないが、「ている」とは共起

できることがわかった。2.4 ではそれぞれが語用論的に持つ意味が異なること、3 章では経験を表す文でも特定の過去について述べる場合があることが明らかになった。4 章では「たことがある」と「ている」だけでなく、経験 (experiential) と存在 (existential) の意味の違いがかかわっていることがわかった。(1a)、(2a) の「たことがある」は主語を特徴付ける経験 (experiential) の意味をもち、発話時と事象に近い (2a) は非文となる。(1b)、(2b) の「ている」は出来事の報告や客観的な出来事の陳述という機能を持つことから、発話時と事象の近さは問題とならず (1b)、(2b) どちらも受け入れられる。以上のように (1a, b)、(2a, b) の違いは説明される。

本論では経験を表す表現「たことがある」と「ている」、またこれらと時を表す副詞との共起関係を考え、以上のことが明らかになった。主語や動詞によってもこの二つの表現と時を表す副詞との共起関係が異なる可能性があるが、一般的に日本語の教科書では説明されていなかったこの二つの表現の違いを本論では述べることができた。

#### 参考文献

- Inoue, Kyoko. (1979). *Studies in the Perfect*, University Microfilms International.
- Leech, G.N. (1987). *Meaning and the English verb*. [Second Edition] Longman.
- Nam-Kil Kim. (1998). On Experiential Sentences, *Studies in Language*, 22(1), 161-204.
- 庵功雄 (2000). 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 庵功雄 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 池田嘉彦 (1981). 『するとなるの言語学』大修館書店.
- 藤森弘子 (2000). 「談話における「コトガアル」の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』26, 32-47.
- メイナード・K・泉子 (1997). 『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性—』くろしお出版.

大学院論文



## **Sisterhood in *Goblin Market***

—Sisters can also form a marriage—

Chencheng Zhao

### **I. Introduction**

*Goblin Market* tells a fantastical story of Lizzie's rescue of Laura, who is tempted by goblin merchants with fruit. The poem ends with a depiction of a scene from their married lives years later. Laura tells her daughter and niece, Lizzie's daughter, the story of how Lizzie rescued her, and she says the following words to the girls.

For there is no friend like a sister  
In calm or stormy weather;  
To cheer one on the tedious way,  
To fetch one if one goes astray,  
To lift one if one totters down,  
To strengthen whilst one stands. (562-567)

Different critics have interpreted Laura's words at the end in very different ways. According to Casey, the poem is a story of two girls redeeming themselves through each other. Laura learns that "daring should be tempered with prudence and that erotic love is empty without emotional commitment" (Casey 69). Lizzie learns that "caution must sometimes give way to bold action and that physical love is both beautiful and integral to the human experience" (Casey 69). According to Casey, the use of the pronoun "one" at the end of the poem subtly suggests that "we all are both redeemer and redeemed, and we may find ourselves, at different times, playing

one part or the other or both” (Casey 70). Michie, however, has a very different view. She argues that “Lizzie’s is the discourse of sameness, Laura’s, like the goblin men’s, is the discourse of difference. Lizzie’s salvation of Laura is the replication of her new self”. The final marriage erases the differences between the sisters (Michie 414), and the pronoun “one” is Laura’s echo to goblin’s words, and a resistance to the erased difference (Michie 419). Casey focuses on the mutual redemption of the sisters, while Michie focuses on the assimilation in sisterhood.

Undoubtedly, both critics focus on the relationship between sisters. Also, the scene in which Laura tells the girls the story focuses more on the importance of sisterhood than on the dangers of the goblins. Thus, the focus of the critics and Laura’s narrative have a common focus, that is, sisterhood. But why didn’t Rossetti end the poem once Lizzie rescued Laura, instead of adding a description of their married lives at the end? What is the connection between their marriages and their sisterhood? I would like to argue that Rossetti put forward the possibility of an ideal marriage made up of sisters. This paper will discuss sisterhood in *Goblin Market* and then speculate on the idea of the ideal marriage in the poem.

## **II. The Plot of *Goblin Market***

A pair of sisters, Lizzie and Laura, who live together, hear the goblins’ fruit hawking. Driven by curiosity, Laura trades a strand of her blonde hair for the goblins’ fruits, which she sucks on greedily. When Laura returns home, Lizzie reminds her that Jeanie ate the goblins’ fruits and died in winter. After Laura, who had eaten the goblins’ fruits, described to Lizzie how delicious the fruits were, they cuddle up and sleep together in a bed. The next day, Laura’s health declines when she realizes she can no longer hear the goblins while Lizzie can. To save Laura, Lizzie goes in search of the goblins. After being abused by the goblins, Lizzie goes home. She allows Laura to kiss her and suck the juice left by the goblins on her

face. The next morning, Laura is reborn. Years later, as a mother, Laura tells her daughter and her niece the story of their victory over the goblins.

### III. Analysis of the fruits and the goblins

The fruits and the goblins together make up the temptation. As Packer points out, the fruits are “symbol of sin and temptation in the Bible” (Packer 376). The goblins are agents of temptation, and they are “purveyors of desire” (Mermin 108). The goblins, in spreading desire, use a great deal of beautiful language to describe the deliciousness of the fruits. From the hawking of the goblins, we learn that the fruits can gratify the senses. For example, these fruits are “sweet to tongue and sound to eye” (30). The goblins give the fruits a sexually seductive character.

There is a scene which describes Laura eating the fruits. Even though she eats a lot, she still feels unsatisfied. This suggests that the function of the fruits is not to satisfy the desire but to “feed the appetite” (Mermin 108).

I ate and ate my fill,  
 Yet my mouth waters still;  
 To-morrow night I will  
 Buy more; (165-168)

In addition to the fact that the fruits can feed the appetite, they are “of a highly imaginative kind” (Mermin 108). The poem mentions twice that “men sell not such in any town” (101, 556). And “[s]he [Laura] dreamed of melons, as a traveller sees / False waves in desert drouth” (289-290). This suggests that the fruits are not real and have a mirage-like illusory character. As Weathers says, the goblins and their wares are “a kind of imaginative, fanciful, visionary — even hallucinatory —



— state of mind” (Weathers 82). The fruits become tempting for Laura and they make Laura imagine the pleasure she will get when her desire is satisfied. However, this expectation of pleasure turns out to be unreal and illusory. The unreality of the fruits is therefore symbolic of Laura’s illusion or false expectation that the satisfaction of desire will bring pleasure. In short, the fruits are a symbol of temptation, and the goblins give them the character of sexual temptation with beautiful language. Once the fruits are tasted by Laura, she falls into temptation and the temptation achieves its purpose. The strong imaginative character of the fruits means that the pleasure and satisfaction that the fruits seem to promise are in fact illusory and unreal.

#### **IV. The reasons Laura is tempted**

Laura is tempted, on the one hand, because she is curious. The goblins give an exaggerated and alluring description of the fruits, such as the combination of such features as “citrons from the South (29),” and “sweet to tongue and sound to eye (30).” The world of sexualized temptation is infinitely attractive to Laura. The temptation of the fruits lingers in Laura’s head “night by night (32)” which causes Laura to “[bow] her head to hear (34).”

On the other hand, Laura is tempted because she longs for love. At the beginning of the poem, after describing the goblins hawking fruits, Laura and Lizzie cling to each other to ward off the cold.

Crouching close together  
In the cooling weather,  
With clasping arms and cautioning lips,  
With tingling cheeks and finger tips. (36-39)

Even though the two girls are hugging each other, Laura feels cold and says “Lie close” to Lizzie (40). This indicates Laura’s desire for warmth, and by extension, for love. Laura then describes to Lizzie the fruits she is seeing as follows:

How fair the vine must grow  
Whose grapes are so luscious;  
How warm the wind must blow  
Through those fruit bushes. (60-63)

The fair vine may represent Laura’s desire for strength, and the warm wind may represent a desire for care. Therefore, we can assume what she is longing for through the fruits is security and love. In fact, after she meets the goblins, she feels that “[t]hey sounded kind and full of loves” (79). Laura believes that the goblins are offering her the fruits out of kindness and that it means that they will bring her security and care. Thus, Laura approaches the goblins out of curiosity and a desire to get security and care.

#### **IV. Analysis of Laura’s withering vitality**

Although Laura approaches the goblins with a thirst for love, we can tell what she actually gets from the following description.

You [Lizzie] cannot think what figs  
My teeth have met in,  
What melons icy-cold  
Piled on a dish of gold  
Too huge for me to hold,  
What peaches with a velvet nap,

Pellucid grapes without one seed:  
Odorous indeed must be the mead  
Whereon they grow, and pure the wave they drink  
With lilies at the brink,  
And sugar-sweet their sap. (173-183)

“Icy-cold,” “huge,” “gold,” “velvet,” “Odorous,” “sugar-sweet” are all imagery that denote touch, taste, smell and sight. From these words we know that Laura’s experience of the fruits is sensual pleasure, that is, erotic love. Apart from the description of sensual pleasures, there is no description of the fair vine and the warm wind. This suggests that Laura did not receive security and love as she expected.

After eating the fruits of the goblins, Laura’s life does not immediately wither away, despite not receiving the love she wanted, and she does her usual chores at home with Lizzie. It is when she realizes she cannot hear the goblins’ voices that her life begins to wither away. Immediately after her realization, she asks herself two questions:

Must she then buy no more such dainty fruit?  
Must she no more such succous pasture find,  
Gone deaf and blind? (257-259)

Both of these sentences are in the form of rhetorical questions and are questions Laura asks herself. Therefore, these two questions indicate that she is beginning to have doubts about herself. Lizzie had urged Laura to come home with her early, otherwise “if we lose our way what should we do?” (219). In fact, on their way back, when Laura finds herself unable to hear the goblins, “her pitcher [is] dripping all the way” (263). “Lose our way” here suggests and implies the loss of self, and “her

pitcher dripping all the way” symbolizes the gradual disintegration of Laura’s ego.

After this, Laura, like Jeanie, is consumed with obsession, searching, and waiting in vain. She is obsessed with finding the goblins, and when she fails to find them, she longingly sows the kernels of the fruits she brings back from the goblin. Yet the kernels do not bud, suggesting that what Laura desires is sterile, or rather, false, just as the fair vine and the warm wind she longs for are in fact merely creations of her own illusion. In her chase for the imaginary objects, she further loses her vitality. We can thus observe that it is Laura’s loss of self that causes her life to begin to dwindle. The endless chase for her imaginary objects causes her life to dissipate.

## **VI. The Development of Sisterhood**

Laura, trapped in a quagmire of desire, is finally rescued by Lizzie because their relationship gradually develops in the course of the poem. There are three embraces between the sisters in this poem, and all three represent their developing relationship. Each of the three embraces will be analysed below.

### **VI .i Analysis of the first two embracing scenes**

The first embrace occurs at the beginning of the poem. There is an image of them holding each other “in the cooling weather” (37), their cheeks and fingertips numb with cold. This image gives the impression of physical protection against coldness, when they are embracing to warm each other. At this time, they are both very innocent “maids” (2) and their relationship is as pure as any sisters’ embraces.

In stark contrast, the second scene of the sisters embracing is full of passionate warmth. It occurs when Laura returns home after eating the fruit and describes to

Lizzie how delicious it is, and Laura says to Lizzie “I’ll bring you plums tomorrow” (170). This suggests that Laura also wants Lizzie to enjoy erotic love.

Golden head by golden head,  
Like two pigeons in one nest  
Folded in each other’s wings,  
They lay down in their curtained bed  
Like two blossoms on one stem,  
Like two flakes of new-fall’n snow,  
Like two wands of ivory. (184-190)

If the seven lines above emphasize the similarities between the two sisters, the following two lines show more of the eroticism between them.

Cheek to cheek and breast to breast  
Locked together in one nest. (197-198)

As Michie points out, it is possible to see in these lines “an erotic invocation of sameness, even as alternative female erotics based on sisterhood, identity, and similarity” (Michie 417). In other words, Lizzie and Laura’s second embrace is full of female eroticism. The second embrace is more erotic than the first one, which is simply for warmth. The change in the embrace stems from the great change in Laura, for by this time Laura has tasted goblins’ fruit and experienced eroticism. As we know from the above lines, Laura and Lizzie are similar. Eroticism, it is suggested, is as much a temptation for Laura as it is for Lizzie. In addition, Lizzie can easily keep her guard up against the goblins who are very different from herself, but it is difficult for her to keep her guard up against Laura, who is very similar to her. Even though Lizzie is silent after listening to Laura’s description of the fruit, her silence

subtly and surreptitiously suggests that she is influenced by Laura's representation of eroticism.

So, the second embrace is an expression of female eroticism between Lizzie and Laura. It is worth noting that the image of their embrace also features the words like "new-fall'n snow" and "ivory". This symbolises that the female erotic love between them has a pure and noble connotation. In summary, their second embrace has developed to a state of feminine eroticism.

### **VI. ii Sisterhood marriage**

After Laura and Lizzie awake, there is a depiction of them taking care of the household together. It is as if their relationship is a marriage between a pair of women, which makes the earlier scene of them embracing and sleeping together appear to be their wedding night.

In their marriage, in addition to the love and protection found in heterosexual marriages, there also are problems that are often found in heterosexual marriages, such as infidelity, for Laura wants to find erotic love outside of marriage, as well as estrangement. Below, the problems in the marriage of these sisters will be analysed.

On the night Laura learns she cannot hear the goblins' voices, she does not tell Lizzie of her concerns, but remains silent until Lizzie goes to sleep. She sits up on her bed, weeping bitterly with remorse.

So crept to bed, and lay  
Silent till Lizzie slept;  
Then sat up in a passionate yearning,  
And gnashed her teeth for baulked desire, and wept  
As if her heart would break. (264-268)

Also, although Lizzie witnesses Laura's growing haggardness, Laura does not share this with Lizzie.

Tender Lizzie could not bear  
To watch her sister's cankerous care  
Yet not to share. (299-301)

Before, Laura used to make Lizzie lie closer to her when she was cold. But now Laura, whose inner pain is much greater than the pain the cold brings her, only cries in secret when Lizzie is asleep. This can be said either that Laura is trying to bear her pain alone or that she is reluctant to ask Lizzie for help. Just as the cheating partner in a heterosexual marriage does not reveal the emotional frustrations happened in the cheating to the other half, Laura is also isolating herself and is estranged from Lizzie. Also, Lizzie sees Laura suffering but does not save her right away because Lizzie "feared to pay too dear" (311). Just as in reality, many marriages are a union of interests and the parties in the marriage will think ahead about the price they will pay for their actions.

Nevertheless, Laura and Lizzie's sisterhood or rather their marriage will continue to develop. The third embrace between the two sisters will be analysed below.

### **VI. iii Analysis of the third embracing scene**

These problems in their marriage also torture Lizzie in deciding whether she is willing "to pay too dear" (311) to save Laura. Finally, Lizzie decides to save Laura, because she remembers Jeanie's death and Lizzie does not want Laura to die. Lizzie's love for Laura makes her dare to break out of her cautious character and her calculations about paying too dear, and she goes to the goblins to get the antidote.

It is notable that Lizzie's words to Laura when she returns home with the antidote are like the words of a lover to her beloved.

Did you miss me?  
Come and kiss me.  
Never mind my bruises,  
Hug me, kiss me, suck my juices  
Squeezed from goblin fruits for you,  
Goblin pulp and goblin dew.  
Eat me, drink me, love me;  
Laura, make much of me; (465-472)

Lizzie's antidote is "juices squeezed from goblin fruits," which strongly suggests erotic love. When Lizzie says these words to Laura, she is actually asking love from Laura. And Laura's first concern is for Lizzie's safety, as quoted below.

Lizzie, Lizzie, have you tasted  
For my sake the fruit forbidden?  
Must your light like mine be hidden,  
Your young life like mine be wasted,  
Undone in mine undoing,  
And ruined in my ruin,  
Thirsty, cankered, goblin-ridden? (478-484)

Laura calls the fruit "the fruit forbidden," indicating that she has broken her illusion about the temptation of the fruits. She is also clearly aware that she is in a state of being "cankered" and "ruined" by desires. This awareness of the state of her own self means that Laura's self is returning. She is coming out of the state of being



“deaf and blind” (259). Awareness of temptation and self occurs in Laura’s words of concern for Lizzie. Those words are a prelude to her response to Lizzie’s love. Thus, Laura responds to Lizzie with enthusiasm.

She clung about her sister,  
Kissed and kissed and kissed her:  
Tears once again  
Refreshed her shrunken eyes,  
Dropping like rain  
After long sultry drouth;  
Shaking with aguish fear, and pain,  
She kissed and kissed her with a hungry mouth. (485-492)

When Laura realizes that the juice left on Lizzie’s face by the goblins is bitter, “That juice was wormwood to her tongue” (494). By this time, Laura has thoroughly come to realise that the deliciousness of the fruit is false and that the nature of desire is bitter. Then Laura is reborn.

The third embrace is one of both physical and spiritual love. Laura and Lizzie’s relationship has developed from mere sisterhood that keeps each other warm to female erotic love and now to a love where each can develop themselves in mutual giving.

Their marriage-like sisterhood is constantly evolving towards ideal marriage. In their marriage, they are equal and independent. They each share the household chores and neither is a burden to the other. They live together in peace. Although they have different personalities and different attitudes towards the goblins, they never argue, accuse each other or make moral criticisms. Both of them also develop themselves in the process of giving love to the other.

Yet the story does not end here. The poem concludes with a description of their

married lives, expressing Rossetti's attitude towards marriage.

## VII. Speculations on Rossetti's view of marriage

The final part of the narrative is a depiction of a scene from their married lives years later, a scene in which Laura tells the story of the goblins to her and Lizzie's offsprings. Not only does this storytelling scene take up very little space in *Goblin Market*, but the narrative style seems flat compared to the magnificent narrative style in the previous part of the poem.

The changed style of narrative may imply Rossetti's attitude towards marriage—marriage makes a woman's life dull. A magnificent narrative style is used to show the women's lives before marriage: full of experiences of hurt, temptation, awakening, growth, and love. Though hardships once caused them pain, in hindsight they are seen as "pleasant days" (550) and "not-returning time" (55). Laura, as she tells her life-story, is nostalgic about the past. However, a flat narrative style is used to depict the dull life of Laura's marriage. Those fascinating adventures exist only in the stories she tells her children.

*Goblin Market* may be a story told by Laura to the offsprings to express her wish for an ideal marriage. Narration is one way in which Laura expresses her wishes. For example, Laura expresses her longing for love by talking about the fair vine and the warm wind. She expresses her desire for erotic love by describing the deliciousness of the fruits. After she is married, she similarly expresses her nostalgia for her pre-marital life by telling the bizarre goblin story. As mentioned earlier, the goblin story, her pre-marital life, is also a story about a sisterhood that develops into an ideal marriage-like relationship. Therefore, Laura, who is in a dull marriage in reality, expresses her longing for an ideal marriage by telling *Goblin Market*. Her wish for the ideal marriage echoes her desire for the fruits of the goblins. Like the fruits, the ideal marriage is similarly longed for, but inaccessible,

and is realised only in Laura's narrative. Therefore, if we look at Laura's fate, which is full of unachieved desires, marriage is like a curse to her.

Another of Rossetti's approaches to marriage is that it is a refuge for Victorian women. In the Victorian era in which Rossetti lived, marriage was the best and safest place for a woman to be. In the Victorian era, Laura would have been classified as a "fallen woman." In those days, a fallen woman ended up either mad or dead (d'Amico 102). Fortunately for Laura, she does not live in the Victorian era, but in the world created by Rossetti. In this world, there is no stigma for a "fallen woman," or nobody to judge and denounce Laura morally. Lizzie has never been critical of Laura either. The two sisters are morally equal. As Jerome McGann points out, there is no moral distinctions between Laura and Lizzie (McGann 253). No one is morally superior to the other. Therefore, if we look at the social reality of the time, marriage is a blessing for Laura.

Another function of this ending is that Rossetti wants to convey the importance of the transmission of the female experience. It is a marriage where the male presence is eliminated almost completely, and "their mother hearts beset with fears" (546) are made meaningful only through the recollection and transmission of female experiences which made them strong. By telling the children this story, Laura is trying to prevent them from suffering the same tragedy, and is full of protective intent. It is just as Rossetti, a female writer, writes about the female experience.

In summary, the last storytelling scene reflects Rossetti's critique of marriage, as it can make a woman's life boring. From the point of view of social reality, however, marriage is a blessing for women. Rossetti outlines a marriage made up of women, showing that a woman's marriage can also be full of courage, wisdom, love and eroticism. At the same time, Rossetti shows us the importance of the transmission of female experience, that is, the protection of the young women through the transmission of experience from mother to child or aunt to niece.

### Works Cited

- Casey, Janet Galligani. "The Potential of Sisterhood: Christina Rossetti's 'Goblin Market.'" *Victorian Poetry* 29.1, 1991, pp. 63-78.
- d'Amico, Diane. *Christina Rossetti: Faith, Gender and Time*. Place of publication: LSU, 1999.
- McGann, Jerome J. "Christina Rossetti's Poems: A New Edition and a Reevaluation." *Victorian Studies* 23.2, 1980, pp. 237-254.
- Mermin, Dorothy. "Heroic Sisterhood in 'Goblin Market.'" *Victorian Poetry*, 1983, pp. 107-118.
- Michie, Helena. "'There is no Friend Like a Sister': Sisterhood as Sexual Difference." *ELH* 56.2, 1989, pp. 401-421.
- Packer, Lona Mosk. "Symbol and Reality in Christina Rossetti's *Goblin Market*." *PMLA* 73.4-Part1, 1958, pp. 375-385.
- Rossetti, Christina Georgina. *Christina Rossetti: the complete poems*. London: Penguin, 2005.
- Weathers, Winston. "Christina Rossetti: The Sisterhood of Self." *Victorian Poetry*, 1965, pp. 81-89.